東北地方北部における瘤付土器の基礎的研究

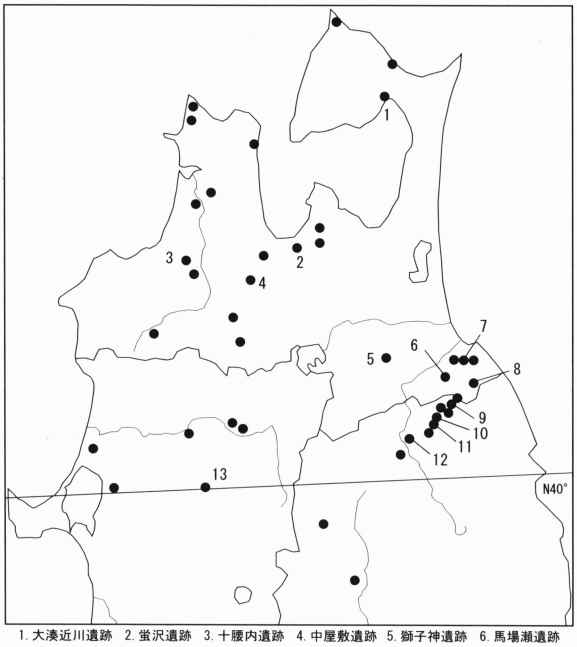
中　門　亮　太

要旨　瘤付土器期の東北地方北部は，土器に残された痕跡から仙台湾周辺地域や北海道など周辺地域との活発な交流があったと考えられる。しかし，その基礎となる編年研究については，仙台湾周辺地域における層位的事例を中心に推し進められてきた経緯があり，東北地方北部においては未だ研究者間での統一見解ができていないのが現状である。本稿ではまず，層位的事例および住居址の重複事例に基づいて大まかな画期を設定したうえで，良好な一括資料を加味し，東北地方北部における瘤付土器を６期に時期区分した。さらに仙台湾周辺地域との対比を行うことで，両地域における瘤付土器の変遷動向を確認し，東北地方北部における瘤付土器の様相を明らかにすることを目的とした。

はじめに

瘤付土器は，器面に粘土粒を貼り付けて装飾とした土器群の総称であり，東北地方の縄文時代後期後葉を特徴づける。当該期は，北海道における突瘤文土器や，関東地方における安行式土器など，瘤状突起を装飾とする土器群が汎東日本的に広がり，それぞれに頻繁な交流があったと考えられている。そのような事実は，関東地方における瘤付土器の出土や，東北地方における突瘤文土器の出土からも窺い知ることができる。

瘤付土器は，縄文時代後期後葉という時代において，東北地方と他地域との比較を行う上で極めて重要な土器であることが分かる。その比較の上で最も重要な瘤付土器の編年研究は，仙台湾周辺地域では小林圭一氏による第Ⅰ～Ⅳ段階の変遷が共通の理解となりつつあるが，東北地方北部（北緯40度ライン以北）（第１図）



1. 大湊近川遺跡　2. 蛍沢遺跡　3. 十腰内遺跡　4. 中屋敷遺跡　5. 獅子神遺跡　6. 馬場瀬遺跡
7. 風張（1）遺跡　8. 滝端遺跡　9. 大日向Ⅱ遺跡　10. 馬場野Ⅱ遺跡　11. 駒板遺跡
12. 小井田Ⅳ遺跡　13. 漆下遺跡

第１図　本稿で取り上げる遺跡と後期後葉の主要遺跡分布

では，磯崎正彦氏による「十腰内編年」を基本としつつも，未だ研究者間での共通認識を得るに至っていない。

本稿では，まず東北地方北部における層位的事例や明確な時期差を示す事例の検討をもとに，瘤付土器の時期区分の線引きを行う。その後，良好な一括資料をもとに型式学的検討を行い，各時期の型式内容を確認する。その上で，仙台湾周辺地域との対比を行い，東北地方北部における瘤付土器の様相を見ていきたい。

1．研究史

1－1．山内清男氏による研究

瘤付土器の編年研究は，山内清男氏によってその端緒が開かれた。山内氏は，埼玉県真福寺貝塚，福島県新地小川貝塚の調査・検討および岩手県大洞貝塚の発掘調査を通して，器面に瘤状突起を配する一群を「所謂薄手式の最も後出型式」として位置づけ，編年的地位を確立させた（山内 1930）。その特徴から，関東の安行式に近似しており，「奥羽の亀ヶ岡式と関東の安行式との共同の母体」として，広域的な広がりを明示した。

その後，『福島県史』における小川貝塚の解説では，出土層位をもとに，瘤付土器を発達の初期（第二区貝層式：加曾利B3式曾谷式並行）と盛行期（第三区貝層式）に二分している（山内 1964a）。ただし，大正13年に福島県に提出した調査概報では，より詳細な瘤付土器の記述をしている。『福島県史』における「瘤付土器の発達の初期」を「古い段階」，「瘤付土器の盛行期」を「比較的新しい段階」とし，「その中間に入るもの」と，これらの後にもう一段階あるという，４段階の細別を指摘している。古い段階の土器としては，「頸と体の間に凸彎した部分がある」注口土器を提示しており，「頸と体の境界にある凸彎の程度が少く，しかしその痕跡を残して居る」注口土器を，盛行期との間に入るものとして提示している（山内 1997［1969］）。

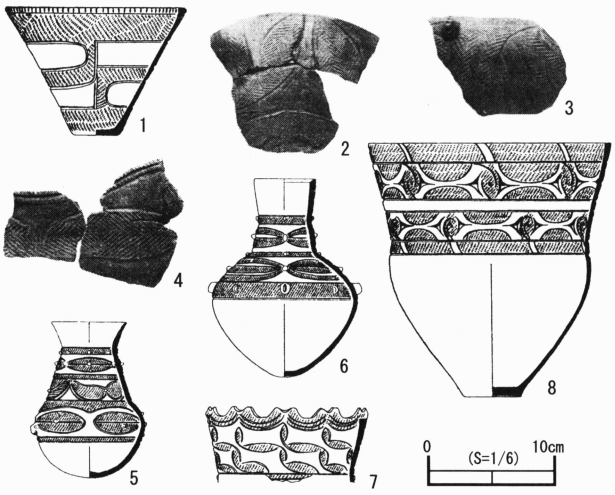
1－2．磯崎正彦氏による「十腰内編年」の提示

東北地方北部における瘤付土器の編年は，『岩木山』のなかで磯崎正彦氏が提示した所謂「十腰内編年」が長らく用いられてきた（今井・磯崎 1968）。「十腰内編年」は，青森県弘前市十腰内遺跡の調査において出土した土器群を，当時型式編年研究が進んでいた関東地方の土器群と対比しつつ，６分類したものである。瘤付土器は第Ⅳ群・第Ⅴ群が相当し，第Ⅲ群は後期中葉，第Ⅵ群は晩期初頭に位置づけられた。ここでは，十腰内式の内容を，第Ⅲ群，第Ⅵ群も含めて確認しておく。

(1) 十腰内第Ⅲ群から第Ⅵ群の内容（第２図）

第Ⅲ群土器は，「やや膨れ上がった口縁の外側に連続して刻目を加えた」ことが特徴としてあげられ，関東地方の加曽利B２式，後藤勝彦氏による宮戸Ⅱb式（後藤 1957）に相当するものとさ

れた。左傾する斜縄文が施されていた前段階の第Ⅱ群土器と比べ，１種類の原体を回転方向を変えて作り出された羽状縄文が主体を占めることを指摘し，「第Ⅲ群土器を他の類から区別する際の有力な決め手」とした。



第２図　「十腰内式」標識資料　※写真は縮尺不同
（1：Ⅲ群、２～４：Ⅳ群、５・６：Ⅴ群、７・８：Ⅵ群）

第Ⅳ群土器は「括れた頸部から放射状に開いた口縁の先端が，先鋭な波状を形作る鉢形土器」が代表的な器形で，後藤勝彦氏による西ノ浜式（後藤 1962）に相当するものとされた。文様は上向きと下向きの弧線を組合せた所謂木葉状の文様が描かれ，文様内には撚りの異なる原体による羽状縄文が施される。器面に瘤状突起が配されるもののその数は多くなく，「貼瘤文土器の前段階的なもの」として位置づけられた。また，「かなり大きな石を含んだ」胎土で「厚手で焼きあがりも良くない」ものと，「精選した粘土を用いて」，「薄手に作られて焼きしまりもかなり良い」ものとの２種類があることが指摘された。左右撚りの異なる原体による羽状縄文は，第Ⅲ群土器との相違として捉えられたが，第Ⅲ群土器との分離については，まだ充分でないとしている。

第Ⅴ群土器は，「俗に言う貼瘤文土器」であるとし，後期最終末に位置づけられた。口縁部や文様の各所に瘤状の突起を加えること，文様は入れ違いの弧線の組み合わせや直線を挟んで弧線を対置したもの，素麺状の細い隆線を貼り付けて文様を形成する手法などが特徴としてあげられた。注口土器は，「注口部を付けた壺形土器」という様相で，突起の配置や文様構成は壺形土器とほとんど同じである。細くて長い口頸部に胴部が丸く張った器形が一般的で，頸部下半から胴部上半に文様帯が形成される。

第Ⅵ群土器は，器形や文様などで「かなり統一的な様相」を示しており，器壁の薄さ，胎土や焼しまりなどから，「第Ⅰ～Ⅴ群とはまた違ったニュアンス」を持つ一群である。磯崎氏らは，この第Ⅵ群を「亀ヶ岡式の，最も初現的な段階にあるもの」として捉え，晩期初頭に位置づけた。深鉢には装飾文様を描く精製土器と，縄文を加えただけの粗製土器が存在する。これら精粗の違いは，胎土や焼きしまりに違いが見られた第Ⅳ群段階の頃が初現である。注口土器は，体部が扁平化するものが現れる。文様は，何段かに重ねて加えられた入組文が著しい特徴であり，上下相対する円弧文が配されるものもある。入組文の曲折部には，円点や三叉状の陰刻が配された例がみられる。

ただし，磯崎氏は「最も新しい大洞Ｂ直前の式は連続する刻目を加えた入組文や弧線文が幾重

にも帯状をなして加えられ，入組文の曲折部にはしばしば三叉状の彫去がある」と，三叉文が後期の段階で成立することを指摘している（磯崎 1964）。

(2) 十腰内編年の評価

十腰内遺跡の調査によって得られた第Ⅰ群から第Ⅵ群までの型式学的分類は，その後十腰内１式～６式という型式名称を当てられ，東北地方北部における縄文時代後期の土器型式として認識されるようになった。

しかし，これらの土器群は層位関係が全く崩れており，関東地方の土器型式と対比して，型式学的に設定されたものであった。磯崎氏自身も資料が非常に少なかったことから，詳しい内容分析が不可能であったことを述べている。瘤付土器を含む第Ⅳ群，第Ⅴ群についても磯崎氏は細分の可能性を示唆していたが，その後氏自身から細分案が提示されることはなく，また十分な再検討も行われないまま十腰内諸型式の名称のみが独り歩きし，各型式の内容理解において研究者間での齟齬が生じることとなった。

１－３．近年の研究動向

瘤付土器の編年研究は，長らく層位的事例に富む仙台湾周辺地域を中心に行われてきた。後藤勝彦氏による一連の宮戸編年（後藤 1956ほか）等があげられるが，ここでは紙幅の都合上省略する。1986年に田柄貝塚の成果が発表されると（宮城県 1986），高柳圭一氏が研究史の整理及び田柄貝塚の成果を加味して，瘤付土器４段階，晩期初頭３段階の変遷過程を提示した（高柳 1988）。その後，高柳氏による編年は「TK編年」と称され[1]，瘤付土器の４段階にわたる変遷過程は，研究者間で統一的な見解となりつつあるほか，広域編年の指標としての評価も得ている。

一方，東北地方北部では依然として，磯崎氏による「十腰内編年」が用いられてきたが，前述のように研究者間での理解が異なり，統一的な見解が見られないできた。そのような中で鈴木克彦氏は，青森県内を中心とした出土遺物の共伴事例と型式学的検討から，「十腰内編年」の再検討を行った（鈴木 2001）。特に文様系統の変遷について細かな考察を行っており，後期後葉の土器を「十腰内４式(木葉状入組文群) ⇒ 十腰内５式(帯状入組文群) ⇒ 風張式(紐状入組文群) ⇒ 大湊近川式(幾何状入組文群)・小井田４式(入組帯縄文群) ⇒ 十腰内６式(入組帯縄文群)」の５階梯に大別し，さらに十腰内５式をa～cに３細分，風張式をA・Bに２細分し，細かな型式変遷を提示した。しかし，東北地方北部のみに他地域と比べ倍近い型式が設定され，当該地域のみに限定的な編年となっており，他地域との整合性に課題を残している。

関根達人氏は，「十腰内編年」を批判的に検討し，東北地方北部における，良好な一括資料の検討を通して，「十腰内Ⅳ群段階」から「駒板段階」に至る６段階の変遷過程を提示した（関根 2004・2005）。貼瘤手法が出現する第１期（十腰内Ⅳ群段階）を瘤付土器の初現として加曽利B３式並行に位置づけ，その後の資料を良好な一括資料が出土した遺跡から，「第２期：馬場瀬段階」⇒「第３期：中屋敷段階」⇒「第４期：滝端段階」⇒「第５期：未命名の段階」⇒「第６期：駒

板段階」としている。第２期から第５期にかけては，層位的事例も確認されており，磯崎氏による十腰内第Ⅴ群，十腰内第Ⅵ群の内容が型式名としての有効性を失っていることを指摘した（関根 2004）。しかしこれらの段階設定は，地域差の検討が不十分であるため，あくまで「時間的区分を指し示す物差し」であるとしている。

２．東北地方北部における瘤付土器編年の作成に向けて

土器の編年を作成する際に重要となるのは，層位的事例の検討と型式学的な検討である。層位的事例は，型式間の時期差の線引きを行うために重要である。一方，ある層位から出土した土器群が型式として認め得るまとまりを持っているかについては，型式学的視点から検討する必要がある。

現在，東北地方北部における瘤付土器の編年研究は，各研究者の型式変遷案が相いれない状態にあるが，それぞれの内容をみると大まかな型式学的変遷はおおむね一致している。そこで，筆者は以前，東北地方北部における瘤付土器の層位的出土事例及び，時期差を示す事例としての住居址の重複関係に注目し，当該期における５段階の時期的変遷の可能性を指摘した（中門 2011）。しかし，そこでは紙幅の都合上，各時期のまとまりを示すための一括資料の検討をしておらず，仙台湾周辺地域との対比も展望を述べるにとどめた。

本稿ではまず，以前に指摘した５段階の時期的変遷を振り返り，良好な一括資料を加味して各段階の瘤付土器の内容を示していく。その上で，小林圭一氏によるTK編年との対比を行い，東北地方北部における瘤付土器の様相を見ていきたい。

３．層位的事例と住居址の重複関係から見た線引き

東北地方北部における良好な層位的出土事例は，青森県青森市（旧浪岡町）中屋敷遺跡の遺物包含層がある（浪岡町 2003）。中屋敷遺跡は，青森県青森市大字浪岡字稲村に所在し，沖積平野から一段高くなった微高地に位置する。遺物包含層は，東から西へ緩く傾斜する微高地に形成されており，後世の盛土をのぞいて堆積層はⅠ層からⅤ層に分けられる。Ⅰ・Ⅱ層は縄文土器及び平安時代の土師器が混在する土層であり，Ⅲ層とⅣ層は縄文土器と縄文時代の石器しか出土しない遺物包含層である。Ⅴ層は地山からの漸移層であり，遺物は出土していない。

層位的事例のほかに時期差を示す資料として，重複関係を確認できる住居址出土資料がある。しかし，住居址が大きく重なる場合はそれぞれの遺物が混在している可能性が大きく注意が必要である。また，住居址の重複が示す時期差が，必ずしも直前型式と直後の型式という時期差であるとは限らない。そのため，土器型式の時期差の線引きを行うには，重複する住居址のうち連続する型式の時期差を含むものがあるか，型式学的特徴に注目して抽出する必要がある。重複する

住居址の事例は，大規模な調査が行われた青森県八戸市風張（1）遺跡（八戸市 1991a・b，2003，2008）と，岩手県軽米町大日向Ⅱ遺跡（岩手県 1986a，1995，1998）において多数みられる。風張（1）遺跡は，青森県八戸市大字是川字狄森に所在し，新井田川下流域右岸の標高20ｍ～30ｍの段丘上に位置する。八戸市教育委員会により，昭和63年から数次にわたる調査が行われており，縄文時代から平安時代にかけての遺構や遺物が確認されている。特に縄文時代後期後半の遺構は，竪穴住居187軒，土坑1300基以上，土壙墓127基などが，広場を中心とした環状を呈する形で検出されている。風張（1）遺跡出土土器については，村木淳氏が住居址の切り合いや文様構成から，少なくとも３つに分類される可能性を指摘している（村木 2004）。大日向Ⅱ遺跡は，岩手県軽米町大字軽米字叭屋敷に所在する。標高163ｍ～173ｍの丘陵地の緩斜面上に位置し，東に雪谷川，西に郷坂川が流れる。1984年に国道395号の道路改良工事に伴って第一次調査が行われ，その後も数次にわたって調査が行われている。

ここでは紙幅の都合上，各事例の詳細な内容については拙稿（中門　前掲）に譲り，そこで確認された５つの時期差を中心に述べる。

３－１．第１期：瘤付土器の初現（第３図）

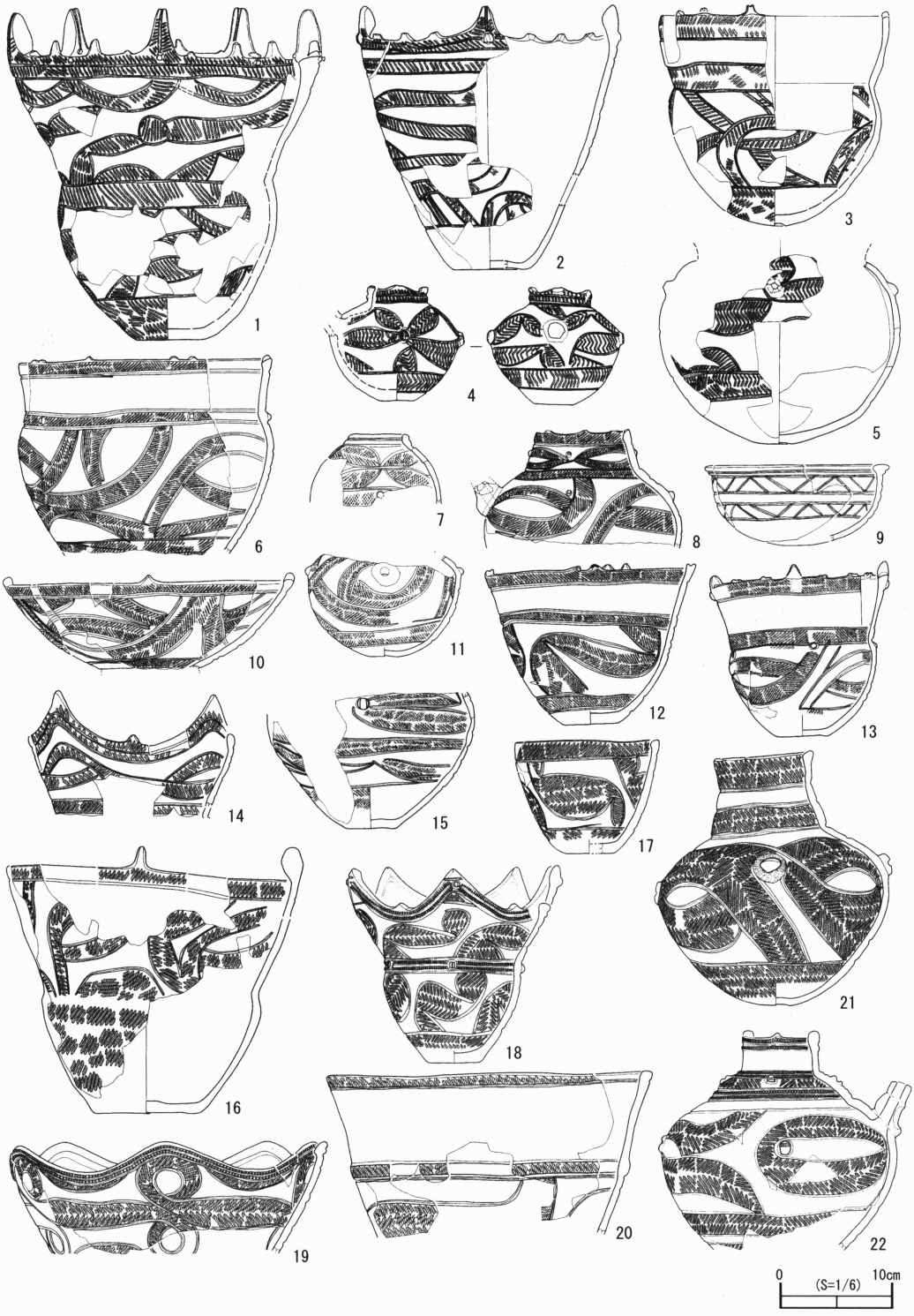
第１期の土器群としては，中屋敷遺跡第Ⅳ層，風張（1）遺跡15号住居・25号住居・35号住居が該当する。

当該期は瘤付土器の初現にあたる。深鉢の器形は，屈曲部を有し胴部が丸く膨らむものが多い。平縁に突起を配したものが主体を占めるようで，Ⅰ文様帯[2]には帯縄文がめぐる。ⅡａおよびⅡ文様帯には，磨消縄文による横位展開の帯縄文（第３図－１・２・14・19）や襷掛け状の文様（第３図－３・６・13・16），鉤状の入組文（第３図－12・17・18・20）が描かれ，羽状縄文が充填される例が多数みられる。貼瘤がなされる例は少なく，口縁部の突起下や屈曲部にわずかにみられる程度である。また，深鉢のⅡａ文様帯に設けられた無文帯（第３図－３・６・12・13・20）や，口唇部や屈曲部に巡る刻目列（第３図－18・19）は，十腰内第Ⅲ群の要素が残るものとして捉えられる。風張（1）遺跡35号住居出土資料は，第３図17・19・20などにみられるように，磨消縄文の幅がかなり太く，やや古手の様相である可能性がある。

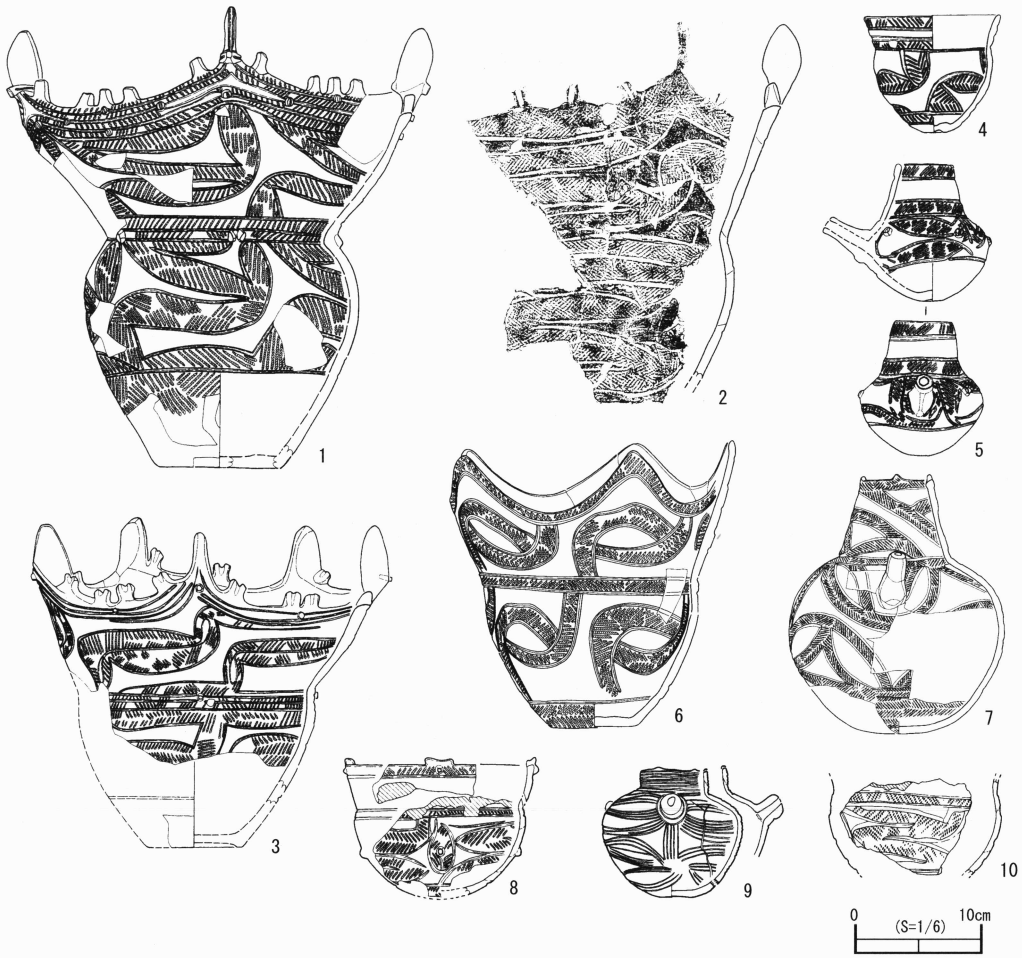
壺形土器・注口土器では，二段構成のものが主体を占めており[3]，短く立ち上がる口縁部や，球形で丸みを帯びた胴部が特徴的である。注口部を含め，４単位の貼瘤が施され，瘤状突起を基点とした木葉状の連結文（第３図－４）や襷掛け状の文様（第３図－８）が描かれる。瘤状突起には刻みを施すものもみられ，注口部の下には疣状の膨らみがあるものがみられる。

３－２．第２期（第４図）

続く段階は，中屋敷遺跡の遺物包含層における層位的事例からたどることができる。資料としては，中屋敷遺跡第Ⅱ・Ⅲ層，風張（1）遺跡28号住居，大日向Ⅱ遺跡HⅣ18住居などが該当する。



第３図　第１期の土器群
（１～５：中屋敷遺跡第Ⅳ層、６～11：風張（1）遺跡15号住居、12～16：同25号住居、17～22：同35号住居）



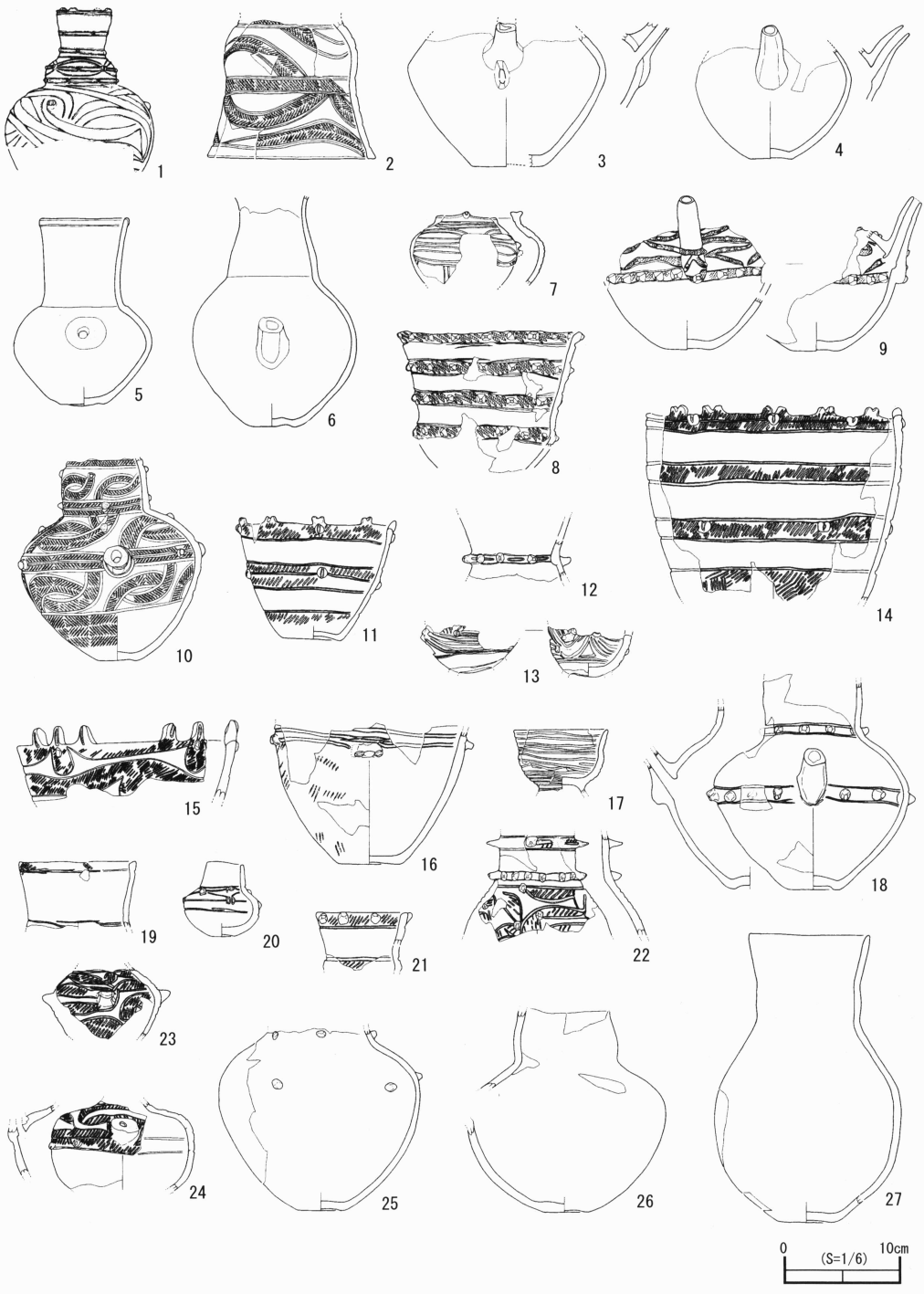
第４図　第２期の土器群
（1：中屋敷遺跡第Ⅱ層、2～5：同第Ⅲ層、6・7：風張（1）遺跡28号住居、8～10：大日向Ⅱ遺跡HⅣ18住居）

深鉢は屈曲部を有するものが主体を占め，大ぶりの波状口縁や大突起間に小突起を配する例がみられる。ⅡaおよびⅡ文様帯には階段状の入組文（第４図－３・４）や襷掛け状の文様（第４図－６）が描かれる。帯縄文が枝分かれするもの（第４図－１・２）や，帯縄文内に沈線や無文部が施されるもの（第４図－３）があり，帯縄文が細身化する傾向をみることができる。

注口土器は，二段構成のものが主体を占めており，短い頸部が特徴的である。わずかではあるが，底部が上げ底気味になるものがみられる（第４図－５・９）。

３－３．第３期（第５図）

第３期と第２期は，層位的事例，および住居址の重複関係からは連続性を確認することができなかった。しかし，後述する第５期を基点に住居址の重複事例を遡ると，第３期の土器が第２期



第５図　第３期の土器群
（１：風張（1）遺跡２号住居、２～７：同24号住居、８・９：同71号住居、10：同152号住居
11～13：大日向Ⅱ遺跡SA03住居、14～27：同SA08住居）

に続く形でまとまりを持っていることが窺える。資料としては，風張（1）遺跡２号住居・24号住居・71号住居・152号住居，大日向Ⅱ遺跡SA03住居・SA08住居などが該当する。

深鉢は類例が少ないが，前段階のような大波状口縁や大振りな突起とは変わって，平縁に突起を配したものが主体を占める。文様を描く磨消縄文が細身化し，貼瘤が多用されることが特徴としてあげられる。

壺形土器・注口土器は，頸部が張り出す三段構成のものが見られるようになり，長く発達した口頸部が特徴的である。最大径部分が胴部やや上方にあり，肩が張った器形が一般的である。襷掛け状の文様や細身の入組文が展開するが，無文研磨のもの（第５図－３～６・25～27）や，微隆起線により文様を描くもの（第５図－１）もみられる。底部は上げ底になるものが主体である。

３－４．第４期（第６図）

第３期と第４期は，風張（1）遺跡における71号住居と51号住居・54号住居の重複関係から線引きを行うことができる。資料としては，風張（1）遺跡７号住居・27号住居・51号住居・54号住居，大日向Ⅱ遺跡HⅣ07住居・SD83土坑などが該当する。

深鉢は，磨消縄文による階段状の入組文やクランク状文，弧線文が描かれ，貼瘤が多用される。特に弧線文は，突起下の縦位のもの（第６図－１）や口縁部下の横位のもの（第６図－２・８），Ⅱａ文様帯に背向する形で配されるもの（第６図－11）など，多用な形で用いられる。帯縄文の幅は，前段階より一層細くなり，無文の磨消部分が目立つ。Ⅱ文様帯は無文になることが多い。貼瘤は横長のもの（第６図－４）やボタン状のもの（第６図－８），小さい疣状のもの（第６図－13）などが見られ，文様・貼瘤ともにバリエーションが増加する時期として捉えられる。

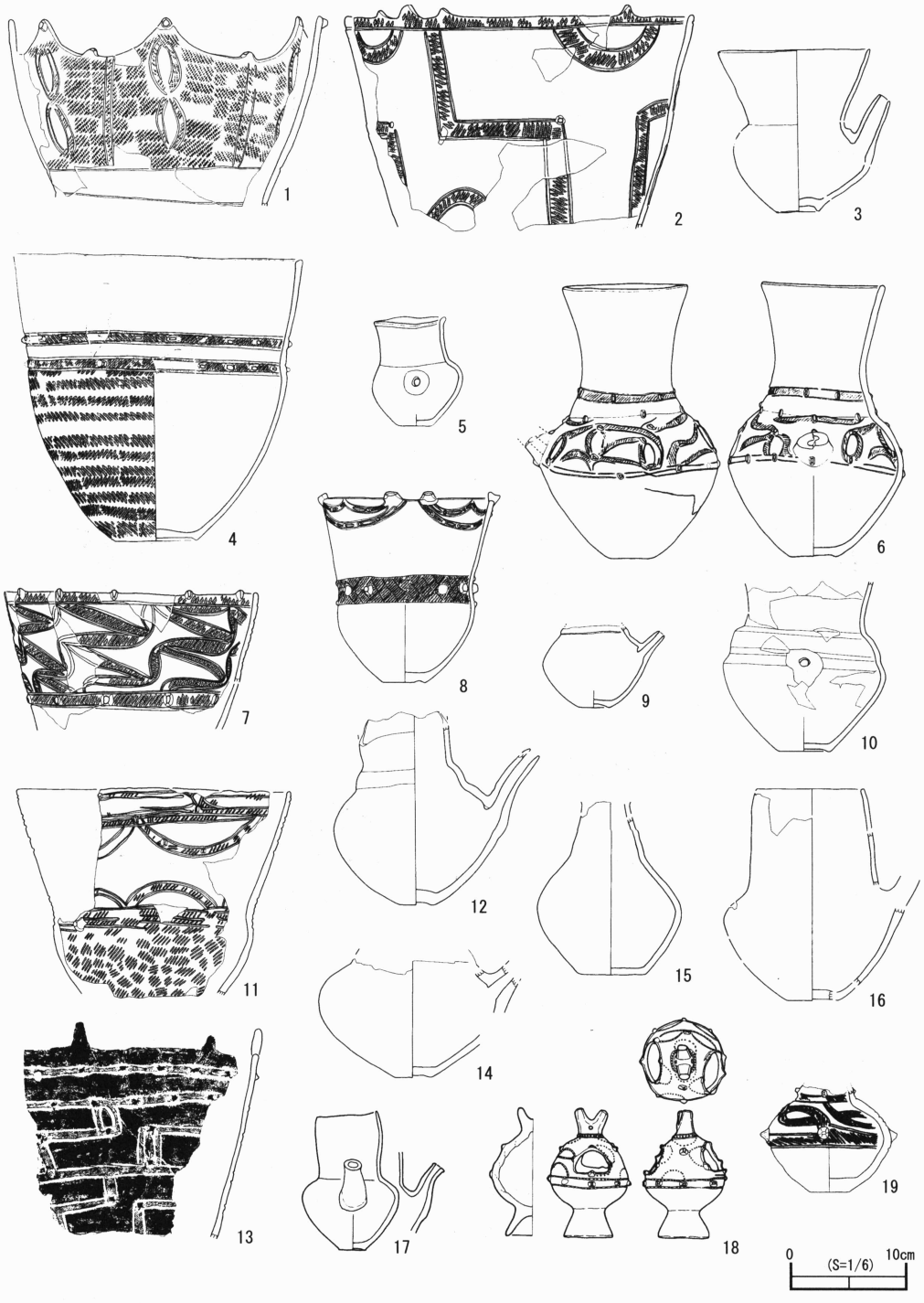
壺形土器・注口土器は，文様が胴上半部に集約し，深鉢と同様に磨消縄文の幅が狭くなることから無文部が目立つようになる。無文研磨の注口土器も引き続き存在し，底部が上げ底気味になる特徴もみられる。

３－５．第５期（第７図）

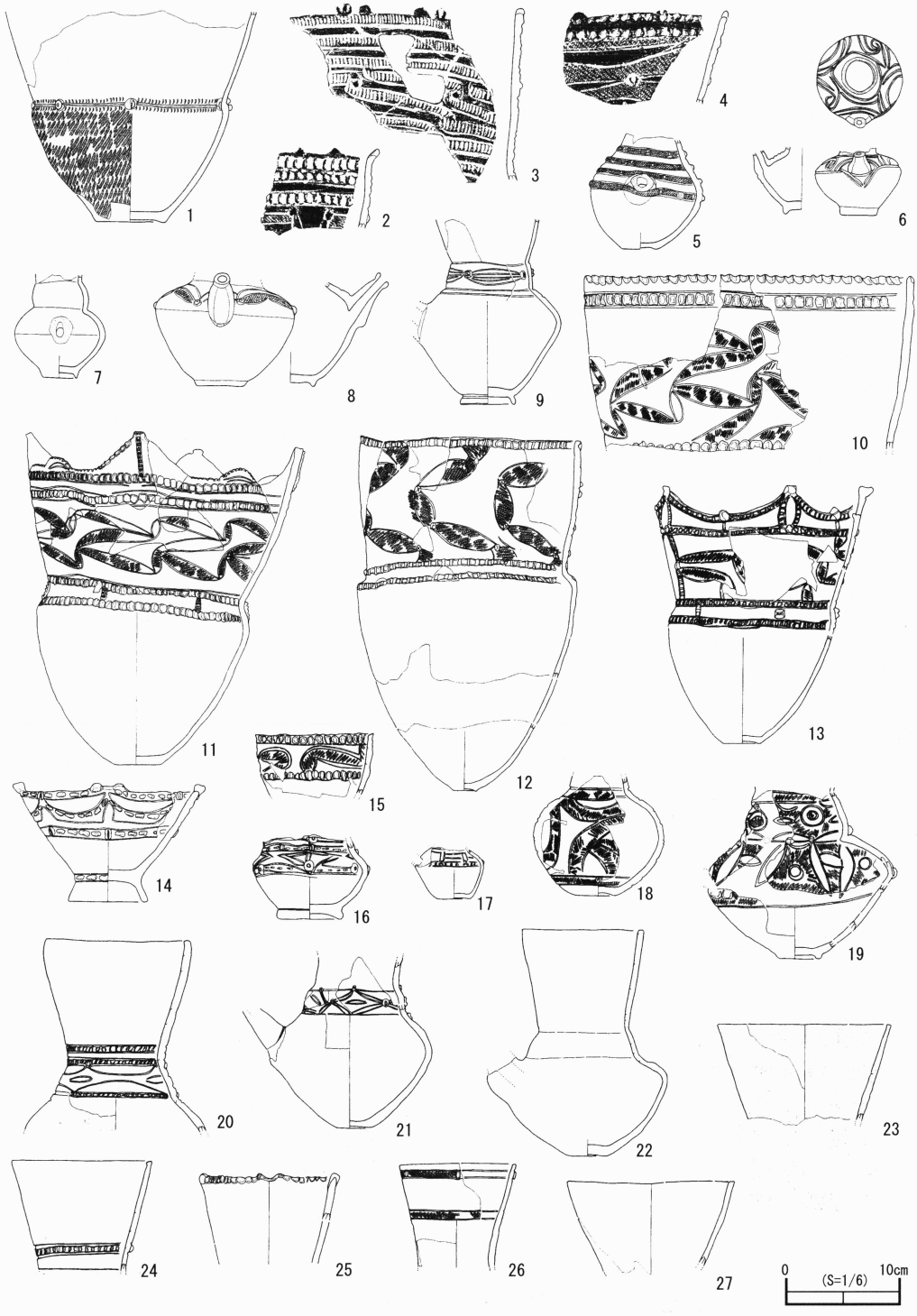
第４期と第５期は，大日向Ⅱ遺跡SD83土坑とSA51住居の重複関係から線引きを行うことができる。資料としては，大日向Ⅱ遺跡SA51住居，風張（1）遺跡153・148号住居などが該当する。

深鉢は，平縁または波状口縁深鉢で，口唇部・屈曲部などに刺突列がめぐるものがみられる（第７図－１～４・10～15）。Ⅱ文様帯は無文となるものが多く，細身に描出された縦位展開・横位展開・弧状の文様などが描かれる。文様内は，縄文ではなく刻目や刺突で充填されたものもみられる（第７図－３・14）。文様モチーフや文様帯構成は前段階とあまり変化はないが，仙台湾周辺地域で特徴的な刺突・刻目充填手法が出現する時期である。

壺形土器・注口土器は，口縁部が長く外反気味に直立する器形が一般的で，文様は頸部もしくは胴上半部に集約される。背向する弧線文（第７図－20）や文様内部の紡錘形・楕円形の区画



第６図　第４期の土器群
（１～６：風張（1）遺跡７号住居、７～10：同27号住居、11・12：同51号住居、13～16：同54号住居、17・18：大日向Ⅱ遺跡HⅣ07住居、19：同SD83土坑）



第７図　第５期の土器群
（１～８：風張（1）遺跡148号住居、９：同153号住居、10～27：大日向Ⅱ遺跡SA51住居）

（第７図－19～21）が特徴的で，底部が作出される例がみられる。

３－６．秋田県漆下遺跡の事例

旧稿を脱稿して後，秋田県漆下遺跡の報告書が刊行された（秋田県 2011）。漆下遺跡は，秋田県北秋田市（旧森吉町）森吉字漆下に所在し，森吉山の北麓を西に流れる小又川左岸の河岸段丘上に位置する。森吉山ダム建設事業に伴って調査が行われた。漆下遺跡では，縄文時代早期から晩期にかけての幅広い時期にわたる遺構・遺物が検出されている。特に，縄文時代後期前葉から後葉にかけては，遺跡の高位面の周辺斜面に５カ所の捨て場が形成されており，大量の遺物が出土している。

捨て場出土資料は，層位的に良好な資料であり，先の時期差の線引きを補強するために，ここでその内容をみていく。

(1) ST01捨て場出土資料

ST01捨て場は，台地西辺部にＶ字状に開口する谷状地形を埋積して形成されている。捨て場は谷状地形に沿って，谷頭側で幅約８ｍ，谷尻側で幅約25ｍ，谷頭から谷尻まで直線距離で約20ｍの範囲に広がる。後世の大規模な改変は受けていない。

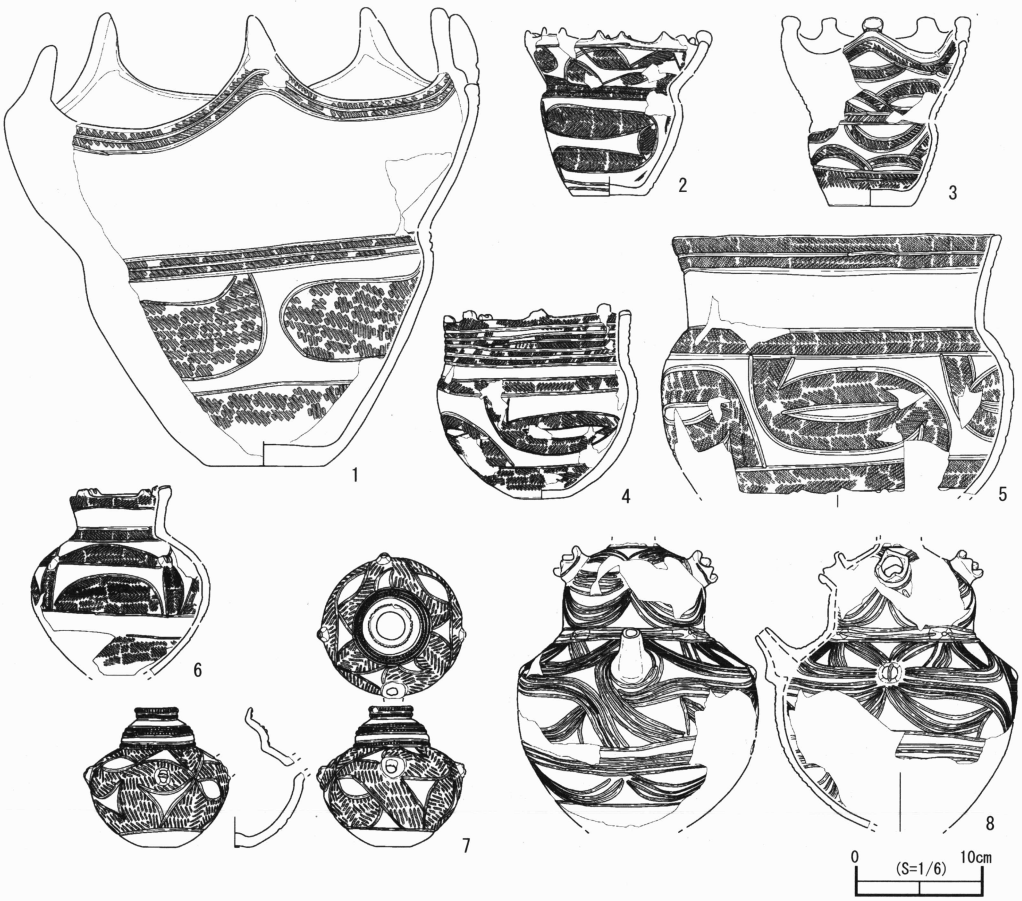
堆積層序は全体で150層に分けられているが，４枚の不整合面が確認されており，層位的な出土状況が認められる。層序は６段階の変遷が確認されており，各層序において後期前葉から後葉にかけての資料が，まとまりをもって出土している。ここでは後期中葉から後葉にかけての資料をみていく。

【Ⅲｅ層群～Ⅲｈ層群（54層～39層）】（第８図）

深鉢は，底部から放射状に立ち上がり，括れを有し口縁部が内湾する波状口縁深鉢や平縁に突起を配したもの（第８図－１～３）と，胴部が球形で屈曲部から口縁が直立気味に立ち上がるもの（第８図－４・５）がある。第８図－１は，口縁部に一条の沈線を伴う縄文帯がめぐり，頸部は無文，胴部には大ぶりな磨消縄文が配される。第８図－２は平縁に突起を配し，口縁部が無文となる。頸部，胴部には弧線の組み合わせによる鉤状の文様が描かれる。第８図－３は，口縁部に無文帯と縄文帯がめぐり，頸部，胴部には弧線の磨消縄文が描かれる。胴部が球形となるもの（第８図－４・５）では，口縁から頸部は縄文帯や無文となるが，胴部には大ぶりな磨消縄文が描かれ，中央に紡錘形の無文部が設けられる。

壺形土器・注口土器は，球形の胴部に短い口縁部がつく二段構成のもの（第８図－６）と，頸部が凸彎し短い口縁部がつく三段構成のもの（第８図－７・８）とがある。いずれも胴部最大径よりやや上に，刻みを有する貼瘤が４単位（注口の場合は注口部を含め４単位）配される。文様は磨消縄文や多重沈線によって描かれる。第８図－６・８は，貼瘤を基点として文様が描かれている。

各器種の器形や，大振りな磨消縄文，注口土器などにおける限定的な貼瘤からみて，これらの



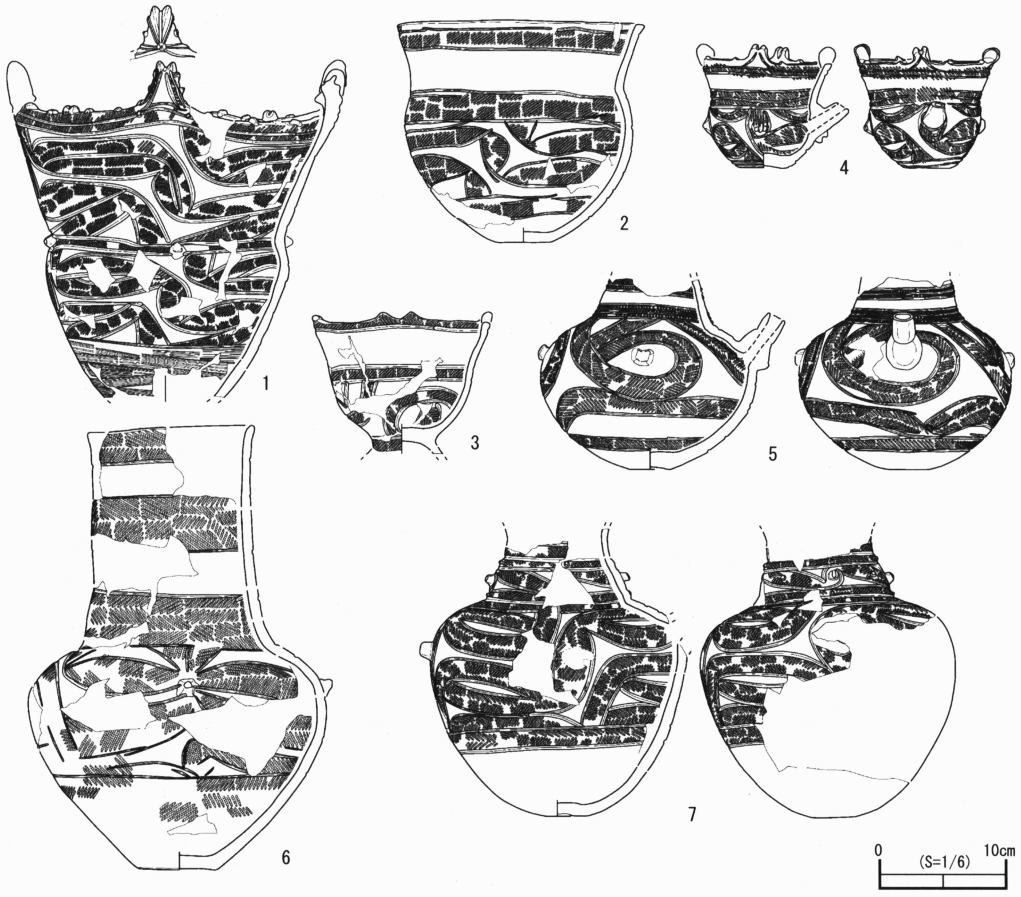
第８図　漆下遺跡ST01捨て場　Ⅲe層群～Ⅲh層群出土土器

資料は第１期に相当する。しかし，第８図－４・５は，磨消縄文内に紡錘形の無文部が設けられており，やや新手の様相がみられる。

【Ⅲi層群（38層～21層）】（第９図）

深鉢は括れを有し口縁部が内湾するものと，球形の胴部で口縁部がやや開きながら立ち上がるものがある。第９図－１は，４単位の大突起を配し，間に小突起を配する。口縁部には一条の沈線を伴う縄文帯がめぐり，頸部，胴部には磨消縄文による文様が描かれる。文様内に沈線が描かれたり，紡錘状の無文部が設けられ，帯縄文が枝分かれする予兆がみられる。屈曲部には貼瘤が配される。第９図－２は，口縁部に縄文帯がめぐり，頸部は無文，胴部には弧線の組み合わせによる階段状の入組文が描かれる。第９図－３は台付鉢であるが，文様帯構成は第９図－２と似ている。胴部には襷掛け状の文様が描かれる。

壺形土器，注口土器は胴部上半がやや扁平化する傾向がみられる。文様は貼瘤を基点に枝分かれする帯縄文（第９図－６）や，襷掛け状のもの（第９図－７）がみられる。貼瘤は刻みを有する



第９図　漆下遺跡ST01捨て場　Ⅲi層群出土時

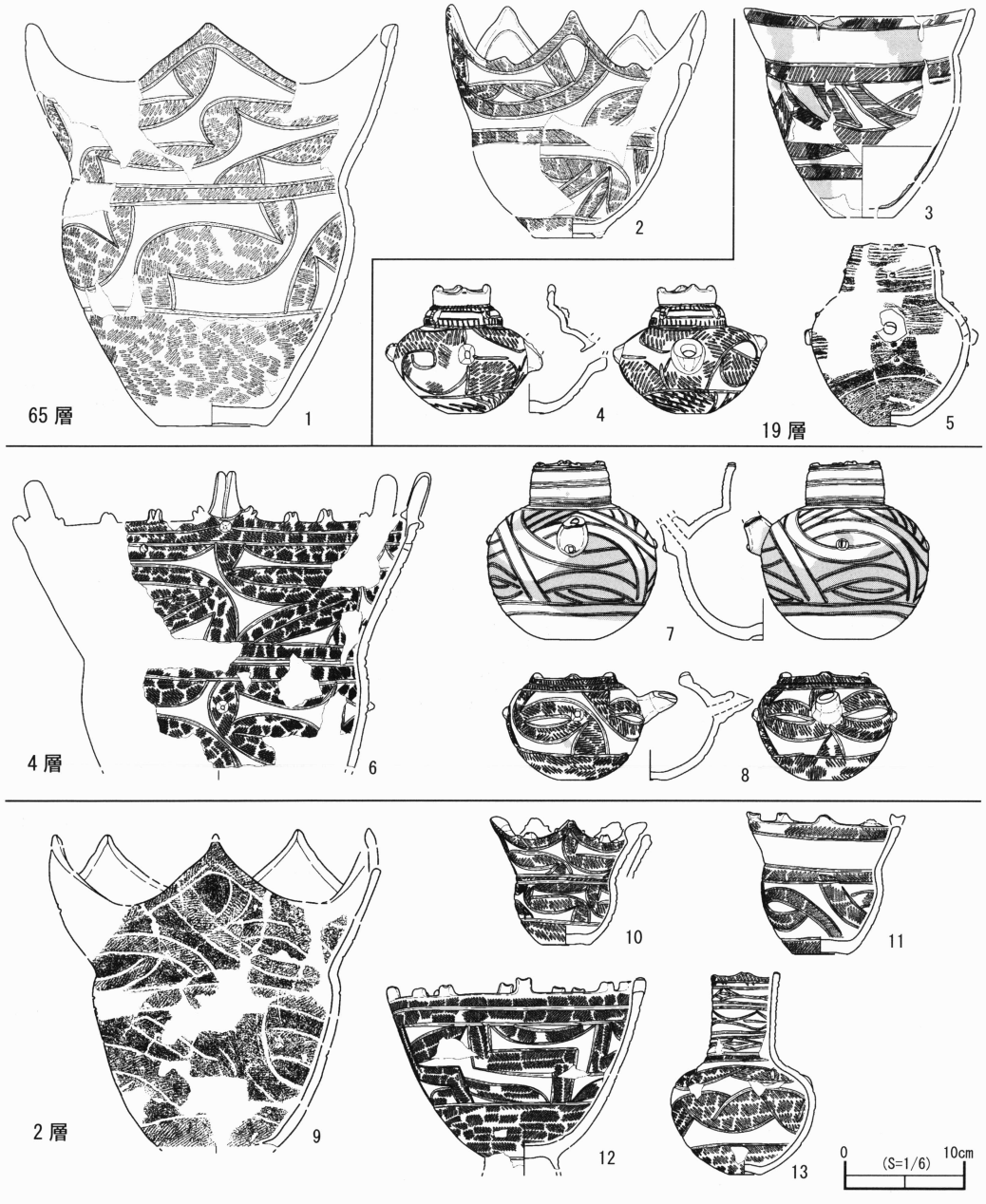
ものが多く，頸部の帯縄文内に小さい貼瘤を施すものもみられる（第９図－７）。

帯縄文内に施された沈線や，貼瘤を基点に展開する帯縄文，深鉢や壺形土器の頸部にも貼瘤がなされる点などからみて，これらの資料は第２期に相当する。

(2) ST101捨て場出土資料（第10図）

ST101捨て場は，台地東辺部に形成されている。範囲は西端の狭い部分で南北約25ｍ，東端の広い部分で南北約65ｍ，東西幅は最大20ｍを測る。一部小規模な谷の浸食が確認されているが，大規模な撹乱は受けていない。ST01捨て場のように，明確な不整合面は確認されていないが，遺物の出土はある程度層位的なまとまりがみられる。

深鉢は，65層から２層まで，いずれも屈曲部を有し口縁部が内湾気味に立ち上がる器形である。文様は，基本的に頸部と胴部に磨消縄文による曲線的な文様が描かれる。４層出土の第10図－６では，文様内に沈線が描かれ，帯縄文が枝分かれする兆しが看取され，２層出土の第10



第10図　漆下遺跡ST101捨て場出土土器

図－９では頸部・胴部とも襷掛け状の帯縄文となっている。壺形土器・注口土器は類例が少ないが，二段構成のものが主体を占める。19層の段階で多重沈線による文様描出（第10図－５）が，４層の段階で微隆起線による文様描出手法（第10図－７）がみられる。

65層，19層出土の資料は，深鉢の器形や文様，注口土器などにおける限定的な貼瘤から，第

１期に相当する。一方，４層出土の資料は，深鉢にも貼瘤が施され，帯縄文内に沈線や無文部が設けられることから，第２期に相当する。２層出土の資料には，襷掛け状文や，口頸部がやや発達した壺形土器が認められる。４層出土の一群よりやや新手の可能性も考えられるが，貼瘤が依然多用されていない点などからみて，同じく第２期に相当すると考えられる。

３－４．小結

以上，東北地方北部における瘤付土器を層位的事例，住居址の重複関係に基づいてみていくと，５段階の線引きをすることができる。

しかし，その対象とすることができた資料は，４遺跡にとどまっており事例数が少ない。そこで以下では，住居址出土資料など一括性が高いと思われる資料を検討し，各段階における内容のまとまりを確認していく。

４．一括性の高い資料の検討

４－１．第１期相当の一括資料（第11図）

第１期の様相を示す資料としては，口唇や屈曲部にめぐる刻目列や，Ⅱａ文様帯に設けられた無文部といった特徴から，青森県馬場瀬遺跡出土資料があげられる。

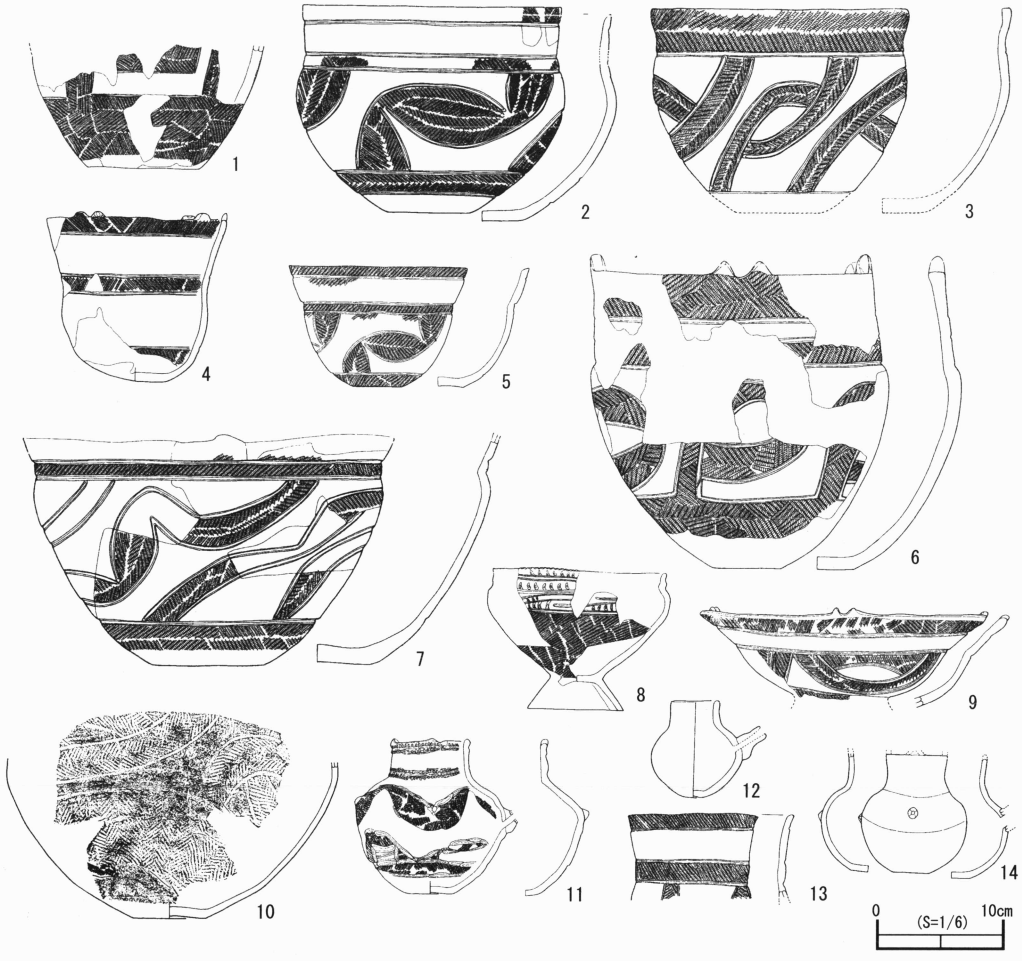
(1) 青森県八戸市（旧南郷村）馬場瀬遺跡（青森県 1982）

馬場瀬遺跡は，青森県八戸市市野沢に所在し，馬淵川沿いの丘陵上に位置する。

深鉢は，球形の胴部を持ち，頸部から口縁部が直立気味に立ち上がるものが主体を占める。文様は，大振りな磨消縄文によって描かれ，襷掛け状の文様（第11図－３・６）もみられる。文様内には，撚りの異なる原体による羽状縄文が施され，各原体間に隙間を設けるものがみられる（第11図－２・７）。鈴木克彦氏は，このような羽状縄文を，続く時期における帯縄文の細身化の初現として指摘している（鈴木 2001）。台付鉢や注口土器では，十腰内Ⅲ群期の特徴であった，口縁部や頸部にめぐる刻目が残るものがある（第11図－８・11）。貼瘤は，注口土器で単位的に用いられる。

４－２．第２期相当の一括資料（第12図）

第２期は，文様を描く磨消縄文の枝分かれが始まる時期である。そのような特徴を持った一群として，青森県獅子神遺跡１号住居，青森県蛍沢遺跡12号住居，岩手県馬場野Ⅱ遺跡KV-02住居出土資料があげられる。

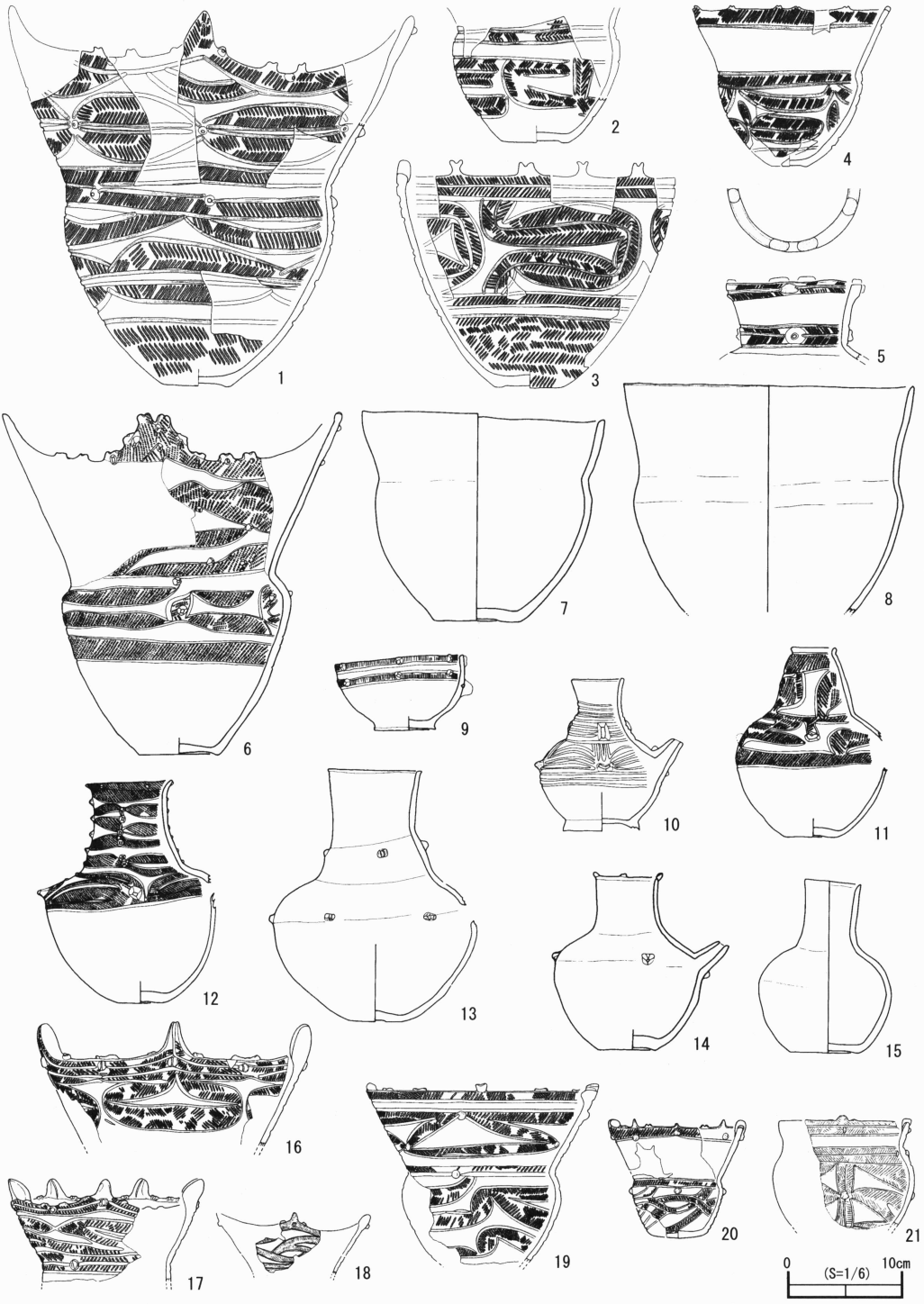


第11図　第１期担当の一括資料（馬場瀬遺跡）

(1) 青森県新郷村獅子神遺跡１号住居（第12図－１～５）（青森県 2003）

獅子神遺跡は，青森県新郷村大字戸来字獅子神に所在し，五戸川北岸の標高120ｍ～140ｍの河岸段丘状に位置する。調査では，縄文時代後期の竪穴住居址２軒，土抗２基，ピット群とそれに伴う礫群が検出され，縄文時代前期から晩期，および続縄文時代の資料が出土している。１号住居は，東西4.9ｍ，南北4.2ｍの略円形を呈し，掘込みは最も深いところで１ｍを測る。

深鉢は，括れを有し頸部から口縁部が開く器形が主体である。大振りな磨消縄文による文様や，異なる原体を用いた羽状縄文など，第１期から続く様相がみられるが，文様内には沈線や細い無文部が設けられるようになる（第12図－１・３・４）。また，貼瘤が深鉢の口縁部や屈曲部，文様内にも施される（第12図－１）。第12図－４は，頸部は第１期と同じく無文であるが，胴部に描かれる帯縄文内に沈線が施されており，第１期から第２期への過渡的な様相をみることができる。



第12図　第２期相当の一括資料
（１～５：獅子神遺跡１号住居、６～15：蛍沢遺跡12号住居、16～21：馬場野Ⅱ遺跡KV-02号住居）

(2) 青森県青森市蛍沢遺跡12号住居（第12図－6～15）（青森市 1979）

蛍沢遺跡は，青森県青森市駒込字蛍沢に所在し，青森平野南部の標高30ｍの丘陵地に位置する。調査では，縄文時代早期および中期から晩期，弥生時代，歴史時代と幅広い時期の遺構・遺物が確認されている。縄文時代後期末葉の資料としては，７軒の住居址が検出されており，住居址内から多量の遺物が出土している。12号住居は，長径4.8ｍ，短径4.5ｍの略円形を呈する。

深鉢は，括れを有する波状口縁深鉢と，平縁で無文のものがある。第12図－６は，頸部および胴部に磨消縄文による文様が描かれる。口縁部は山形突起が４単位配され，突起間には台形の小突起が配される。突起下や磨消縄文の連結部，屈曲部などには貼瘤が施される。

壺形土器・注口土器は，二段構成のものが主体を占め，底部がやや上げ底気味になる。文様は口縁部から胴上半部にかけて描かれ，胴下半部が無文となる。また，多重沈線により文様を描くもの（第12図－10）や無文研磨のもの（第12図－13～15）がみられる。貼瘤は，注口部を含む単位的な使用が主であるが，頸部や口縁部にも用いられるようになる。

(3) 岩手県軽米町馬場野Ⅱ遺跡KV-02住居（第12図－16～21）（岩手県 1986b）

馬場野Ⅱ遺跡は，岩手県軽米町大字軽米第12地割字馬場野に所在し，雪谷川と郷坂川に挟まれた丘陵の一部および，小沢が形成した小規模な平坦部に位置する。標高は195ｍ～215ｍの範囲にある。大日向Ⅱ遺跡とは非常に近接した位置にあり，遺跡の内容や性格において多くの関連性や共通点が指摘されている（岩手県 1986b）。KV-02住居は，斜面の裾部に形成されており，後世の道路や溝によって南側が削られているが，径5.6ｍの円形を呈していたと思われる。

深鉢は，括れを有し平縁に突起を配した器形が主体である。文様は磨消縄文によって描かれるが，文様内に設けられる三角形の無文部が特徴的である（第13図－16・19）。貼瘤は，口縁部の突起下や屈曲部，帯縄文の連結部などに用いられる。

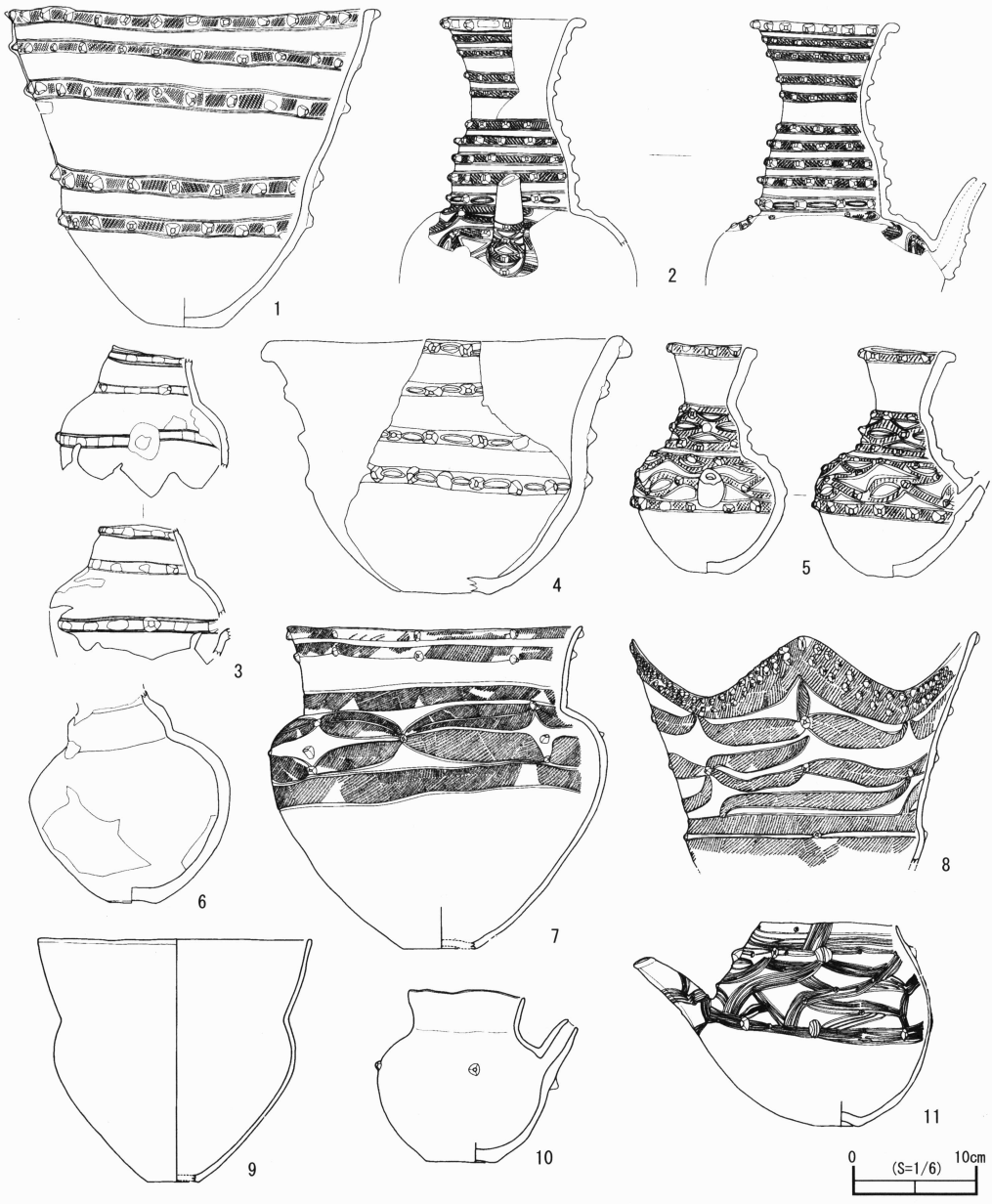
４－３．第３期相当の一括資料（第13図）

第３期は貼瘤が盛行する時期であり，壺形土器・注口土器は口頸部が長く発達するという特徴がみられる。そのような特徴を持つ一群として，青森県滝端遺跡第４号住居（平成９年度調査，平成10年度調査），青森県蛍沢遺跡13号住居出土資料があげられる。

(1) 青森県階上町滝端遺跡出土資料（第13図－１～６）（階上町 2000）

滝端遺跡は，青森県階上町大字平内字滝端に所在し，階上岳山麓の西から北方に広がる蒼前平段丘の平坦面上に位置する。古くより，縄文時代中期から晩期の遺跡として知られており，調査においては縄文時代草創期の遺構や遺物も確認されている。遺物の主体は縄文時代後晩期の資料で，多量の土器，石器のほか，膝を抱える土偶や岩版，動物形土製品なども出土している。

平成９年度調査検出の４号住居は，南東側の一部が調査区外にかかるものの，径2.5ｍ前後の円形を呈するものと思われる。深鉢は，緩い括れを有する平縁深鉢で，Ⅱａ文様帯，Ⅱ文様帯には帯縄文が横位に数条めぐり，その上に貼瘤が多数配される（第13図－１）。注口土器は，口頸部



第13図　第３期相当の一括資料
（１～３：滝端遺跡４号住居（平成９年）、４～６：同４号住居（平成10年）、７～11：蛍沢遺跡13号住居）

が長く発達し，帯縄文あるいは２条の沈線による区画が横位に数条めぐり，その上に貼瘤が多数配される（第13図－２・３）。体部文様は，細身の帯縄文による入組文が描かれ，貼瘤が多用される（第13図－２）。

平成10年度調査検出の４号住居は，５号住居に一部を壊されるものの，径４ｍ前後の円形を

呈すると思われる。深鉢は，緩い括れを有する平縁深鉢で，口縁部から胴上半部にかけて４本の横位区画がめぐる（第13図－４）。区画上には貼瘤が配され，貼瘤間を短沈線でつなぐ。同様の手法は，第13図－２の頸部にもみられる。壺形土器・注口土器は，頸部が緩く張り出す三段構成のもので，底部がやや上げ底気味となる（第13図－６）。文様は細めの帯縄文によって描かれ，帯縄文の各所に貼瘤が配される。

(2) 青森県青森市蛍沢遺跡13号住居出土資料（第13図－７～11）（青森市 1979）

蛍沢遺跡13号住居は，先述の12号住居の南西約５ｍの位置にあり，長径4.9ｍ，短径4.1ｍの略楕円形を呈する。

深鉢は，12号住居出土資料と同様，括れを有する波状口縁深鉢，平縁深鉢がみられる。文様は貼瘤を起点に帯縄文が展開するもの（第13図－７・８）と，無文のものがある（第13図－９）。貼瘤は，12号住居出土資料よりも多用されており，第13図－８では，口縁部に二列の貼瘤列がめぐる。注口土器は二段構成のものが出土しており，無文研磨のもの（第13図－10）と多重沈線による文様を描くもの（第13図－11）がある。

４－４．第４期相当の一括資料（第14図）

第４期は，文様を描く帯縄文が極端に細くなる時期である。また，文様は弧線文を筆頭に，様々なモチーフがみられ，貼瘤のバリエーションも増加する。深鉢は，平縁のものが主体となり，壺形土器・注口土器は口頸部が長く伸び，文様が頸部から胴上半部に集約してくるという特徴がみられる。そのような様相を示す資料として，風張（1）遺跡63号住居，岩手県小井田Ⅳ遺跡ＤⅡ-３住居出土資料があげられる。

(1) 青森県八戸市風張（1）遺跡63号住居出土資料（第15図１～６）（八戸市 2003）

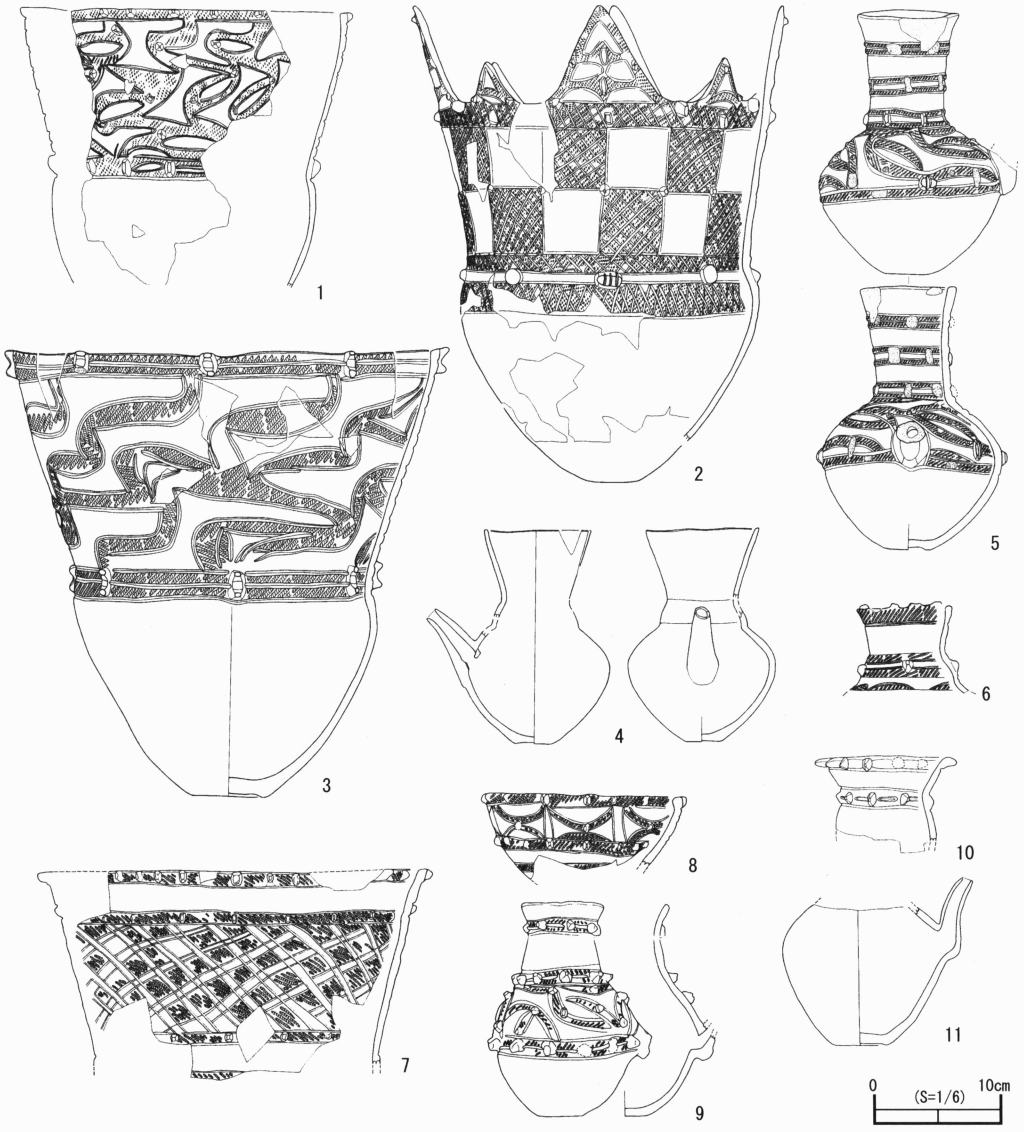
風張（1）遺跡63号住居は，北西部が一部調査区外にかかっているが，径6.7ｍ×6.5ｍの略円形を呈すると考えられる。

深鉢はⅡ文様帯が無文となる。文様は枝分かれした磨消縄文が描かれ，文様内に楕円形や三叉状の無文部が設けられるため，帯縄文の幅が非常に細くなる（第14図－１・３）。また，縄文と斜めの沈線を地文とした格子目状の文様（第14図－２）がみられる。貼瘤は円形でボタン状のものや縦長のもの，二股のもの，縦位の刻みを持つものなど，バリエーションが豊かである。注口土器は，文様が頸部から胴上半部に集約し，底部が上げ底のものが主体を占める。

(2) 岩手県一戸町小井田Ⅳ遺跡ＤⅡ-３住居出土資料（第14図７～11）（岩手県 1983）

小井田Ⅳ遺跡は，岩手県一戸町楢山字平舟向地平に所在し，洪積世中位段丘の北東縁が開析されてできた谷に位置する。ＤⅡ-３住居は径3.3ｍの円形を呈する。

深鉢は緩いくびれを有する平縁深鉢で，格子目状の磨消縄文がⅡａ文様帯に描かれる（第14図－７）。鉢は，上下に対向する弧線文（第14図－８）がみられる。壺形土器・注口土器は口縁部や頸部に貼瘤が多用される。また，帯縄文上や沈線による横位区画内の貼瘤間を単沈線でつなぐ手



第14図　第４期相当の一括資料（１～６：風張（1）遺跡63号住居、７～11：小井田Ⅳ遺跡ＤⅡ-３住居）

法がみられる（第14図－９・10）。

４－５．第５期相当の一括資料（第15図）

第５期は，刺突・刻目手法が現れる時期である。そのような特徴を示す資料として，秋田県漆下遺跡ST01捨て場Ⅳ層群出土資料と，青森県むつ市大湊近川遺跡105号住居出土資料があげられる。

(1) 秋田県北秋田市漆下遺跡ST01捨て場　Ⅳ層群（20層～15層）出土資料（第15図１～８）（秋田県 2011）

深鉢は，緩い屈曲部を有し，口縁部が平縁あるいは平縁に突起を配するもの（第15図－１・３），屈曲部を有さない小波状口縁のもの（第15図－２）がみられる。口縁部は貼瘤列や刻目列がめぐり，頸部に磨消縄文による文様が描かれる。胴部は基本的に無文で，わずかではあるが底部が作出される。頸部の文様は，右下がりに連結する入組文が主体を占める。貼瘤は口縁部や屈曲部，文様内などに多数配される。

注口土器は緩く膨らんだ頸部を有する三段構成のものが主体を占める。底部は上げ底のものと，わずかに作出されるものがある。文様は胴上半部及び頸部に集約され，口縁部，胴下半部は無文となり丁寧なミガキ調整が施される。文様は横位の縄文帯や刻目帯が主で，微隆起線による入組文もみられる（第15図－６・８）。貼瘤は胴部，頸部，口縁部などに多数配される。

(2) 青森県むつ市大湊近川遺跡105号住居出土資料（第15図－９～18）（青森県 1987）

大湊近川遺跡は，青森県むつ市大湊浜町に所在し，陸奥湾に面した標高約22ｍの河岸段丘上に位置する。縄文時代前期から縄文時代末の大洞A'式までの資料が確認されているが，中でも後期後葉が主体を占める。後期後葉の資料は，突瘤文土器[4]をはじめ，マクレを伴う刺突や，地文縄文を磨り消さない文様描出手法など，当該期の北海道に特徴的な土器群がみられる。出土した黒曜石の約７割が北海道産であることから，北海道からの集団的な移住の可能性が指摘されている（青森県 1987）。

深鉢，台付鉢は，平縁を基調とし，突起の配置によって小波状を呈するものもみられる。口縁部などに刺突列がめぐるが，これらは先述のマクレを伴う刺突である（第15図－９・14）。文様は，瘤状突起を基点に横位展開する細身の磨消縄文が描かれる。壺形土器・注口土器は，胴部上方に最大径があり，底部が作出される。文様は胴上半部や頸部に曲線的な文様（第15図－16）や貼瘤を基点とした文様（第15図－18），刺突列などが描かれる。

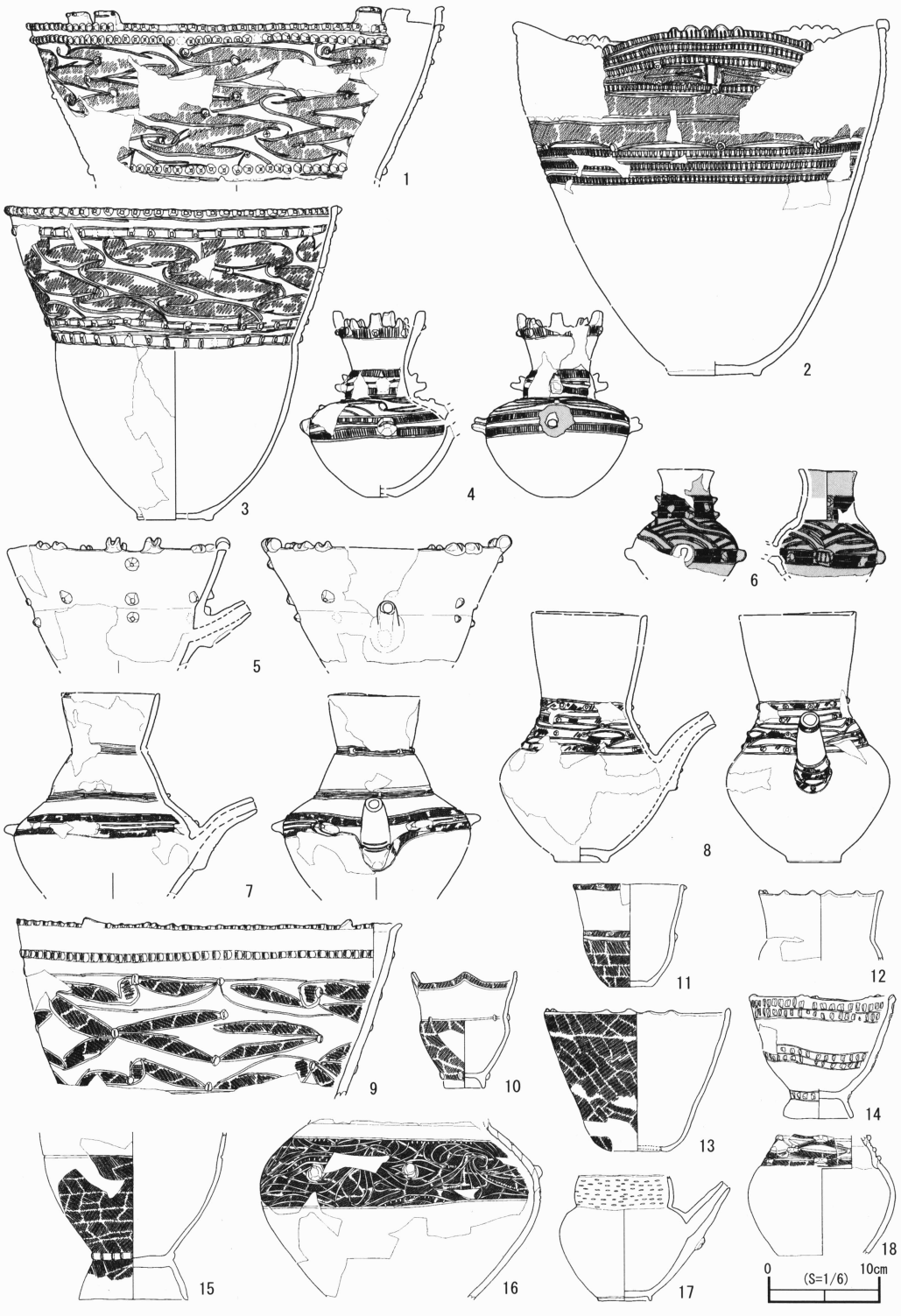
４－６．第６期相当の一括資料（第16図）

ここまで，層位的事例および住居址の重複関係から確認できた，第１期から第５期にかけての内容を確認するため，一括資料を検討してきた。各時期における内容や特徴がより明確となり，５期の時期区分は概ね妥当であるといえるであろう。

しかし，最も後出である第５期と，晩期初頭大洞B1古式[5]との間は，型式学的にみるとやや隔たりがある。これらをつなぐ資料として，岩手県駒板遺跡ⅢC87-5ピット，秋田県漆下遺跡SX07（性格不明遺構）出土の一括資料がある。ここでは，これらの一括資料を第６期として後期最終末に位置づけたい。

(1) 岩手県軽米町駒板遺跡ⅢC87-5ピット出土資料（第16図１～５）（岩手県 1986c）

駒板遺跡は，岩手県軽米町大字山内第４地割字駒板に所在し，瀬月内川と雪谷川に挟まれた丘



第15図　第５期相当の一括資料（１～８：漆下遺跡ST01捨て場Ⅳ層群、９～18：大湊近川遺跡105号住居）

陵の西斜面に位置する。縄文時代後期前葉から晩期の資料が主体を占め，後期の住居址が34軒，晩期の住居址が８軒検出されている。ⅢC87－５ピットは，中央尾根南斜面に位置し，径2.1ｍ×2.5ｍの不整円形を呈し，深さは89㎝を測る。

深鉢は緩い括れを有し，平縁に台形の突起を配したものが主体となる。Ⅰ文様帯は帯縄文がめぐり，Ⅱａ文様帯，Ⅱ文様帯に文様が描かれる。Ⅱ文様帯は縄文のみとなるものもある（第16図－３）。緩衝帯には，横位帯縄文（第16図－１）や横位沈線（第16図－２・３）がめぐり，沈線区画内に横位単沈線を充填する例もみられる（第16図－２）。文様は，右下がりの階段状の入組帯状文が一般的で，貼瘤は見られない。入組帯状文の連結部には，三叉状の沈刻が施される（第16図－３）。また，第16図－３では，口縁部突起下に，横位区画の沈線から突出する形でＹ字状の沈線が描かれる。

壺形土器・注口土器は，無文研磨のものが出土しており，底部が作出されている。

本資料は，他の研究者も後期最終末の資料として位置づけており（小林 2011，鈴木 2001，関根 2004・2005など），研究者間での統一認識がなされている一群である。

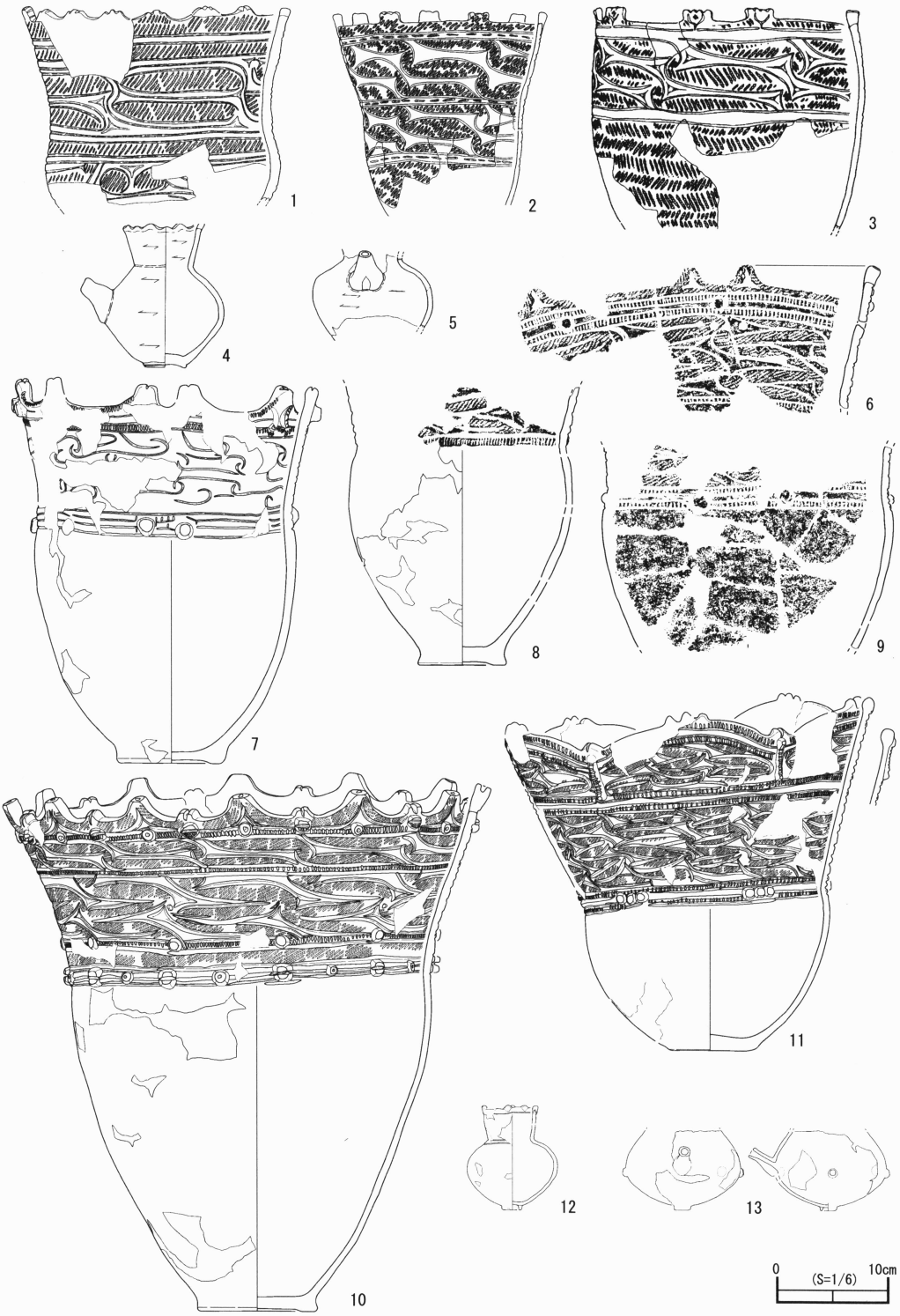
(2) 秋田県北秋田市漆下遺跡SX07（性格不明遺構）出土資料】（第16図６～11）（秋田県 2011）

SX07は調査区西端の斜面肩部に位置し，約６ｍ×3.2ｍの不整形を呈し，深さは地山面から1.4ｍを測る。覆土下位（15・16層）からは縄文前期円筒下層ａ式期の土器片が出土しており，覆土中位から上位にかけては後期後葉の土器群がまとまって出土している。平面形から，複数の遺構が重複している可能性も指摘されるが，出土遺物の時期が大きく離れることから，覆土中位から上位出土の土器群は一括性が高いと考えられる。

深鉢は山形の突起を多数配する小波状口縁が主体を占め，口縁部には縄文帯や刻目帯がめぐり，突起下には三叉状の沈刻が施される。胴部は無文となり，頸部には右下がりの階段状の入組帯状文が描かれる。刻目帯による区分でⅡａ文様帯が重畳化する例もみられる（第16図－10・11）。貼瘤は縦長で刻みを有するものやボタン状のもの，中央に刺突を施すものなど，バリエーションに富む。壺形土器・注口土器は，無文であるため，文様構成は不明である。第16図－13は球形の胴部を持ち，底部が小さく作出される。

４－７．小結

以上，東北地方北部における一括資料をもとに，瘤付土器の時期的な線引きの内容について確認を行ってきた。その結果，東北地方北部における瘤付土器は第１期から第６期にわたる変遷が指摘できる。一部に，器形や文様などで前後の様相が看守される事例があるが，それらが更なる細分が可能なのか，あるいは過渡的な様素によるのかは，今後更なる検討が必要である。しかし，第１期から第６期の線引きは，おおむね妥当であると考えられ，各段階の特徴は以下のようにまとめられる。



第16図　第６期相当の一括資料（１～５：駒板遺跡、６～13：漆下遺跡SX07）

【第１期】

第１期は，瘤付土器の初現である。鈴木克彦氏による「十腰内４式」から「十腰内5a式」，関根達人氏による「第１期：十腰内第Ⅳ群段階」の一部と「第２期：馬場瀬段階」に並行する。深鉢は括れを有する大波状口縁深鉢と，丸い胴部から口縁部が直立気味に立ち上がる平縁深鉢が主体を占める。Ⅰ文様帯は，横位帯縄文が巡る場合が多いが，刻目列など十腰内第Ⅲ群期の特徴も未だ残る。文様は大振りな磨消縄文によって描かれ，異なる原体を用いた羽状縄文が充填されるものが多くみられる。壺形土器・注口土器は，二段構成のものと，頸部が凸彎した三段構成のものとがある。貼瘤は，主として壺形土器や注口土器において単位的に用いられるようになり，深鉢では口縁部突起下や屈曲部に配されるものがわずかにみられる。また，多重沈線による文様描出は既にこの時期から確認される。

【第２期】

第２期は，器形は前段階をほぼ踏襲しているが，壺形土器・注口土器では底部がやや上げ底気味になるものがみられる。鈴木克彦氏の「十腰内5b式」から「十腰内5c式」の一部，関根達人氏の「第３期：中屋敷段階」に相当する。最大の特徴は，文様を描く磨消縄文が枝分かれする兆しを見せ始めることである。すなわち，帯縄文内に沈線が施されたり，紡錘状の無文部が設けられたりするようになる。紡錘状の無文部が施される例は，襷掛け状文へと発展すると考えられる。貼瘤は，壺形土器・注口土器において前段階と同様に単位的な利用がみられるほか，深鉢でも口縁部や屈曲部に一般的に付されるようになる。

【第３期】

第３期は，瘤状突起が多用される時期として特徴付けられる。鈴木克彦氏の「十腰内5b式」から「十腰内5c式」の一部，関根達人氏の「第４期：滝端段階」の一部に相当する。帯縄文や沈線による横位区画を数条めぐらせ，貼瘤を多数配するものが多くみられる。文様は貼瘤を基点に展開する帯縄文によって描かれる。壺形土器・注口土器では，口頸部が長く発達し，底部は上げ底のものが主体を占める。それまで器面全体に描かれていた文様が頸部や胴上半部に集約し，無文研磨のものなど丁寧なミガキ調整が施されるものが出現する。

【第４期】

第４期は，文様を描く磨消縄文が極端に細身化する。鈴木克彦氏の「風張式」，関根達人氏の「第４期：滝端段階」の一部に相当する。深鉢は平縁または平縁に突起を配するものが主体となり，文様モチーフは枝分かれする入組文やクランク状文，格子目状の文様，弧線文など多様化する。貼瘤も，ボタン状のものや縦長のものなど，バリエーションが増加する時期である。壺形土器・注口土器は，わずかに膨らむ頸部を有する三段構成のものが多くなる。文様は前段階と同様，胴上半部に集約するものが多く，無文研磨のものもみられる。

【第５期】

第５期は，刺突・刻目手法が現れる時期である。鈴木克彦氏の「大湊近川式」，「小井田Ⅳ式」，

関根達人氏の「第５期：未命名の段階」に相当する。深鉢はⅡ文様帯が無文となるものが多くなり，口唇部や屈曲部，文様内に刻目や刺突が充填される。壺形土器・注口土器は，口縁部が長く発達した三段構成のものが主体となる。文様は胴上半部や頸部に集約され，背向する弧線文や紡錘形の区画が主体的に描かれる。

【第６期】

第６期は後期最終末に位置づけられ，鈴木克彦氏の「駒板式」，関根達人氏の「第６期：駒板段階」に相当する。平縁に台形突起を配し緩い括れを有する装飾深鉢に代表される。文様は階段状の入組帯状文が主体で，磨り消された無文部や口縁部の突起下には三叉状の沈刻が付される。注口土器は，体部が球形で小さい底部が作出されたものがみられる。

５．仙台湾周辺地域との対比

瘤付土器の編年研究は，層位的事例が豊富な仙台湾周辺地域を中心に進められてきた背景があり，現在では小林圭一氏による４段階の変遷過程（高柳 1988，小林 1999・2011）が研究者間で共通の認識となりつつある。この変遷過程は，広域編年の指標としての評価も与えられており，「TK編年」の名称で知られる。以下では，これまで確認してきた東北地方北部における６期の変遷をTK編年と対比し，両地域における瘤付土器の変遷動向を考察する。

５－１．TK編年第Ⅰ段階

TK編年第Ⅰ段階は瘤付土器の初現期で，５単位の大波状口縁深鉢に代表される。文様は大振りな磨消縄文による入組文が描かれ，貼瘤手法の有無から新古の２段階に分類できる。

東北地方北部においては，第１期が瘤付土器の初現期で，大振りな磨消縄文による文様描出は続く第２期でもみられる。貼瘤は，第１期では壺形土器・注口土器に単位的に用いられ，第２期になると深鉢にも用いられるようになる。そのため，TK編年第Ⅰ段階の古相が東北地方北部における第１期，新相が第２期に相当すると捉えられる。しかし，第１期の土器群は，口唇や屈曲部に施される刻目列や，Ⅱａ文様帯に設けられた無文部など，仙台湾周辺地域と比べやや古手の様相が残るものがみられる。

５－２．TK編年第Ⅱ段階

TK編年第Ⅱ段階は，貼瘤の盛行期であり，平縁に突起を配した深鉢が主体を占める。文様は細身の帯縄文による襷掛け状文や入組文が描かれる。貼瘤は各所に多用され，縦長のものや三日月形で背向する二個一対のものなど，バリエーションが増える。一部には，帯縄文内に無文部を設ける例や，貼瘤を基点に帯縄文が展開する例など，帯縄文の枝分かれがみられる例がある。

東北地方北部における第３期は，第２期からみられた帯縄文の枝分かれが発達し，瘤状突起を

基点に展開する帯縄文がみられる。貼瘤は横位帯縄文や沈線区画上に列をなして配され，第２期と比べ非常に多用される。また，第３期の風張（1）遺跡第２号住居にみられる微隆起線文注口土器は，TK編年第Ⅱ段階に東北地方全般において広く流通することが指摘されており，広域編年の指標として重要視される。以上から，第３期はTK編年第Ⅱ段階に相当すると捉えられる。

第４期は，文様を描く帯縄文の幅が細くなり，文様，貼瘤のバリエーションが豊かになる時期である。仙台湾周辺地域においては，TK第Ⅱ段階から，横位につながる入組文や階段状の入組文が比較的多くみられ，文様バリエーションの増加というよりもむしろ，統一的な様相へと収斂していく様子がうかがえる。しかし，貼瘤は様々な形がありバリエーションに富んでいることから，第４期もまたTK編年第Ⅱ段階に相当すると捉えてよいであろう。

従来の研究では，これら文様や貼瘤のバリエーションが増加する時期は，型式学的に分類することが困難であり，研究者により様々な解釈・型式設定が行われてきた。しかし，文様や貼瘤のバリエーションの増加を，単なる時期や地域の差異として捉えることは注意しなければならない。例えば，風張（1）遺跡第63号住居出土遺物（第15図－１～６）のように，一括性が高いと思われる資料であっても，格子目状の文様や枝分かれした文様，階段状の入組文など様々な文様が存在している。現状では，これらの時期は，様々な土器の文様や装飾が模索された時期として認識しておくべきであろう。また，特に東北地方北部において文様や貼瘤のバリエーションの多様化が顕著であることから型式の変遷において，東北地方北部と仙台湾周辺地域が必ずしも同一の歩調ではないということも想定され，今後注意して検討していくべきであろう。

５－３．TK編年第Ⅲ段階

TK編年第Ⅲ段階は，器形や器種構成は前段階を継承しているが，文様内を縄文ではなく刺突や刻目で充填する刺突・刻目手法が現れる時期である。文様は細身の入組帯状文や縦位連結の入組文，弧線文などが描かれる。口縁部突起下や入組文の結節部には，⊥字状の沈線や末端が突出する沈線などにより，三叉文の祖形となる文様が現れる。貼瘤は頸部文様の連結部などに施され，二個一対のものやボタン状のもの，χ字状のものなどがみられる。

東北地方北部における第５期が相当するが，刺突・刻目手法は仙台湾周辺地域と比べ主体的ではなく，文様内においては縄文が充填されるものも残る。また，仙台湾周辺地域における土器群が，幅の狭い細密な刻目であるのに対し，東北地方北部はやや大ぶりな刺突による文様内充填が多くみられる。東北地方北部では，北海道に特徴的にみられる突瘤文やマクレを伴う刺突もあり，本地域における刺突・刻目手法の成立については，仙台湾周辺地域のみならず，北海道との影響関係も考慮すべきであろう。

また，東北地方北部では，第５期の段階にあっても，磨消縄文の連結部や口縁部突起下に三叉文の祖形となる文様があまり見られない。また，仙台湾周辺地域においては，文様モチーフがTK編年第Ⅱ段階から横位展開や階段状の入組帯状文に代表されるような統一的な様相へと収斂

していくのに対し，東北地方北部は第４期が非常に文様バリエーションの豊富な時期であったため，第５期においてもあまり統一的な様相ではない。TK編年第Ⅱ段階と第３期，第４期の対比においてみられた地域差が，この段階においても引き続き残っていることが窺える。

５－４．TK編年第Ⅳ段階

TK編年第Ⅳ段階は，後期最終末に位置づけられ，口端部に配される頂部が肥厚して２～３分された台形突起や，階段状の入組帯状文など斉一性が強まる時期である。口端部の突起下や頸部文様内には，未だ副次的な沈刻文様ではあるものの三叉文が描かれる。注口土器は体部が球状で小さく作出された底部が特徴的な「高石野類型注口土器」が広く分布する。

東北地方北部においては，第５期から層位的に連続する事例は確認できないが，良好な一括資料である岩手県軽米町駒板遺跡ⅢC87－５ピット出土土器や，秋田県漆下遺跡SX07出土土器などの第６期がTK編年第Ⅳ段階に相当すると考えられる。東北地方北部においても，口縁部の突起下や入組帯状文の連結部分などに三叉文がみられるようになる。文様内に充填される刻目も細く繊細なものが主体を占め，東北地方全体で統一的な様相がみられる。ただし，漆下遺跡出土の深鉢は，Ⅱ文様帯が無文で貼瘤のバリエーションが多く，入組文内の三叉文も独立しておらず，駒板遺跡出土例と比べ，やや前段階的な様相が見られる。第５期から第６期にかけての過渡的な資料とも考えられる。

また，東北地方北部における三叉文は，⊥字状の沈線や，文様を描く沈線の末端が伸びた形など，祖形となるべき文様が前段階にはほとんど見られず，第６期になってある程度完成した形で現れる。三叉文は東北地方北部における縄文時代後晩期の弁別において，重要な意味を持っており[(6)]，その出現・展開過程に関してはさらなる検討が必要であろう。

東北地方北部			仙台湾周辺地域	関東地方	区分基準（下線は共通認識）
中門	関根達人	鈴木克彦	小林圭一		
後期中葉	十腰内Ⅳ群段階	十腰内４式	宝ヶ峯式	加曽利B3式	（関根・鈴木）貼瘤手法の出現 （鈴木）木葉状入組文群
第１期	馬場瀬段階	十腰内5a式	第Ⅰ段階（古相）	曽谷式	大振りな磨消縄文 ５単位の大波状口縁 （中門）単位的な貼瘤 （鈴木）襷掛け状入組文群
第２期	中屋敷段階	十腰内5b式 十腰内5c式	第Ⅰ段階（新相）		貼瘤手法の発達 （中門）帯縄文の枝分かれ （鈴木）帯状入組文群
第３期	滝端段階		第Ⅱ段階	安行１式	貼瘤の多用 無文研磨の注口土器
第４期		風張式			帯縄文の細身化 貼瘤・文様バリーションの増加
第５期	未明名の段階	大湊近川式・小井田Ⅳ式	第Ⅲ段階	安行２式（古）	刺突・刻目手法の出現 三叉文の萌芽
第６期	駒板段階	駒板式	第Ⅳ段階	安行２式（新）	入組帯状文 三叉文 高石野類型注口土器

結語

本稿では，まず筆者が以前設定した，東北地方北部における瘤付土器の時期区分を振り返り，その内容を新たな層位的事例，および良好な一括資料によって検討した。その結果，東北地方北部における瘤付土器は６期に分類することができる。瘤付土器の初現期である第１期，帯縄文が枝分かれの傾向を見せ始める第２期，貼瘤の盛行期である第３期，文様・貼瘤のバリエーションが多用になる第４期，刺突・刻目手法がみられる第５期，台形の口縁部突起，入組帯状文，三叉文に代表される第６期である。当該地域においては，瘤付土器の初現期は層位的事例により，帯縄文の枝分かれを示す資料が一時期として捉えられるなど，細かな変遷を確認することができた。一方で，末葉段階の資料においては明確な時期差を示す事例が乏しく，ある程度のまとまりは捉えられるものの，晩期大洞Ｂ1古式への変遷過程などについては不明瞭な点が残る。また，大湊近川遺跡などにみられる北海道の影響や三叉文の展開過程など，検討すべき課題は多い。

しかし，仙台湾周辺地域との対比の結果，東北地方における瘤付土器の変遷過程として以下の３点を指摘することができる。

① 瘤付土器の初現期は，東北地方北部，仙台湾周辺地域とも，括れを有する波状口縁深鉢に代表され，大振りな磨消縄文によって文様が描かれる。貼瘤は単位的な利用が主で，限定的である。

② 瘤付土器の中葉～後葉段階には，東北地方北部，仙台湾周辺地域ともに貼瘤が盛行し，各所に多用されるようになる。括れを有する深鉢を主体としつつも，文様や貼瘤の種類は多様化し，バラエティーに富むようになる。その後，仙台湾周辺地域では，刺突・刻目手法が主体となり，口縁部突起下や入組文の結節部に三叉文の萌芽がみられ，横位展開や階段状の入組帯状文など統一的な様相になっていく。一方，東北地方北部では帯縄文の幅が狭くなり，様々な文様モチーフが描かれ，三叉文の萌芽が殆どみられない。また，北海道に特徴的な刺突や文様描出手法がみられる。

③ 末葉段階には，口縁部に配される台形突起や，階段状の入組帯状文，高石野類型注口土器などにみられるように，東北地方北部と仙台湾周辺地域で文様や装飾が統一的に収斂されていく。この様相は，後続する晩期に東日本を席巻した大洞式へと続いていくものと思われる。

ここで注目されるのは，後期末葉段階から晩期へ向かうにつれ統一的な様相になっていく瘤付土器は，仙台湾周辺地域の動向がベースとなっていることである。まず晩期初頭の代表的な文様である三叉文は，仙台湾周辺地域と比べ，東北地方北部ではその成立・発達過程が不明瞭である。東北地方北部で三叉文がある程度完成した形で出現したというよりは，三叉文の発信地が仙台湾周辺地域にあり，東北地方北部へと波及していった可能性が想定される。また，瘤付土器の後半期にみられる刺突・刻目手法も，北海道を中心に展開する大ぶりな刺突と，仙台湾周辺を中心に展開する細かい刻目という２つの系統が東北地方北部ではみられるが，最終的には後者へと

収斂していく。東北地方北部では北海道の影響も一時期にはみられるものの，東北地方が全体的に統一的な様相へ収斂していく過程には，やはり仙台湾周辺地域が土器の文様描出やモチーフに関して強い影響を持っていたことが指摘できるであろう。それらが果たして何を背景としているのか，どのような要因によって土器の様相が統一的になっていくかなどについては，今後土器に残された痕跡を詳細にたどることで考察をしていきたい。

謝辞

本稿は，2010年12月11日に行われた早稲田大学考古学会における口頭発表をもとに，内容を再検討・修正したものである。学部時代からの指導教授である高橋龍三郎先生には，先の発表，および本論の執筆においても多岐にわたるご指導をいただきました。修士論文の副査であった寺崎秀一郎先生，山形眞理子先生には，口頭試問の際に多くのご意見・ご教授をいただきました。小林圭一氏，小林克氏には，当該期の資料や報告書・論文の紹介など多くのご教授をいただきました。また，穴澤咊光氏，馬目順一氏には研究発表の際に，貴重なご意見・ご指摘をいただきました。資料調査においては，荒谷伸郎，伊藤由美子，岡本洋，木村高，根岸洋，村木淳，森淳の各氏，青森県埋蔵文化財調査センター，青森県立郷土館，階上町教育委員会，八戸市教育委員会の各機関にご協力いただきました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

註

(1)　大塚達郎氏は，小林（高柳）圭一氏による一連の瘤付土器研究を，広域編年の指標としうるとして「TK編年」の名称を付与しており（大塚 2000），本稿でもその呼称を用いる。

(2)　文様帯の呼称については，（山内清男 1964b）に準拠する。なお，文様帯間の境界や屈曲部にめぐる帯状の区画は，どちらの文様帯に帰属するか不明瞭であり，小林圭一氏は「緩衝帯」という呼称を用いており（小林 2008），本稿でもその語句を用いる。

(3)　口縁部と胴部のみからなるものを二段構成，口縁部・頸部・胴部からなるものを三段構成という。

(4)　青森県内おける突瘤文は，関根氏による研究では氏の「第２期：馬場瀬段階」から確認されており，これは本稿における第１期並行期である。そのため，突瘤文自体は第５期の特徴ではなく，東北地方北部の縄文時代後期において古くからみられるものである。

(5)　東北地方北部における縄文時代晩期編年については，（小林 2011）に準拠する。

(6)　東北地方における縄文時代後晩期の弁別については，三叉文の出現を持って晩期とする意見と，三叉文が文様内において主体的な位置を占めることを持って晩期とする意見がある。仙台湾周辺地域の変遷過程を見ると，後者の意見が妥当であるといえる。しかし，東北地方北部においては，三叉文が後期後葉から末葉へかけて発展していく過程は不明瞭であり，最終末になってある程度完成した形で出現する様子が窺える。三叉文の出現や拡散過程については，別途検討を行いたいと考えている。

引用・参考文献

磯崎正彦　1964 「縄文式土器・各論　Ⅳ後期の土器」『日本原始美術１　縄文式土器』講談社

今井富士雄・磯崎正彦　1968 「第16節　十腰内遺跡」『岩木山－岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』　岩木

山刊行会
大塚達郎　2000『縄紋土器研究の新展開』同成社
後藤勝彦　1956「宮城県宮戸島里浜台囲貝塚の研究」『宮城県の地理と歴史　1集』地域社会研究会
後藤勝彦　1957「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器編年について」『塩竈市教育委員会教育論文　第二集』塩竈市教育委員会
後藤勝彦　1962「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器について－陸前地方後期縄文式文化の編年的研究－」『考古学雑誌』第48巻第1号　日本考古学会
小林圭一　1999「東北地方　後期（瘤付土器）」『縄文時代』10号1冊分　縄文時代文化研究会
小林圭一　2008「縄文時代晩期初頭に関する一段層－山形県高瀬山遺跡出土土器の検討を通して－」『先史考古学研究』第11号　阿佐ヶ谷先史学研究会
小林圭一　2011『亀ヶ岡式土器成立期の研究－東北地方における縄文時代晩期前葉の土器形式－』早稲田大学総合研究機構先史考古学研究所
鈴木克彦　2001『北日本の縄文時代後期土器編年の研究』雄山閣
海峡土器編年研究会　2007『第5回　縄文時代後期後葉～晩期初頭の課題－資料集－』
関根達人　2004「本州出土の突瘤文・刺突文系土器群とその意味」『人文社会論叢』人文科学篇第12号　弘前大学人文学部
関根達人　2005「「十腰内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ群土器」に関する今日的理解」『葛西勵先生還暦記念論文集　北奥の考古学』葛西勵先生還暦記念論文集刊行会
高柳圭一　1988「仙台湾周辺の縄文時代後期後葉から晩期初頭にかけての編年動向」『古代』85号　早稲田大学考古学会
中門亮太　2011「東北地方北部における瘤付土器の編年研究」『早稲田大学大学院文学研究科紀要　第4分冊』第56輯　早稲田大学大学院文学研究科
村木淳　2004「風張（1）遺跡の縄文時代後期後半の土器と住居」『葛西勵先生還暦記念論文集　北奥の考古学』葛西勵先生還暦記念論文集刊行会
山内清男　1930「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』1巻第3号
山内清男　1964a「小川貝塚」『福島県史　第6巻　考古資料』
山内清男　1964b「縄文式土器・総論」『日本原始美術　1　縄文式土器』講談社
山内清男　1997［1969］「福島県小川貝塚調査報告」『先史考古学論集（一）』示人社

報告書

青森県教育委員会　1982『馬場瀬遺跡』
青森県教育委員会　1987『大湊近川遺跡』
青森県教育委員会　2003『獅子神遺跡』
青森市蛍沢遺跡発掘調査団　1979『青森市蛍沢遺跡発掘調査報告書』
秋田県教育委員会　2011『漆下遺跡』
（財）岩手県埋蔵文化財センター　1983『小井田Ⅳ遺跡発掘調査報告書』
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1986a『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1986b『馬場野Ⅱ遺跡発掘調査報告書　分冊1（本文・表・図版）』
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1986c『駒板遺跡発掘調査報告書』
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1995『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書－第2次～第5次調

査－』
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1998『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書－第６次～第８次調査－』
階上町教育委員会　2000『滝端遺跡発掘調査報告書』
八戸市教育委員会　1991a『風張（1）遺跡Ⅰ』
八戸市教育委員会　1991b『風張（1）遺跡Ⅱ』
八戸市教育委員会　2003『風張（1）遺跡Ⅴ』
八戸市教育委員会　2008『風張（1）遺跡Ⅵ』
浪岡町教育委員会　2003「平成14年度中屋敷遺跡発掘調査報告書」『浪岡町文化財紀要Ⅲ』
宮城県教育委員会　1986『田柄貝塚Ⅰ　遺構・土器編』宮城県文化財調査報告書第111集

図版出典

第１図：筆者作成
第２図：（今井・磯崎 1968）をもとに作成
第３図　１～５：（浪岡町 2003），６～22：（八戸市 1991a）
第４図　１～５：（浪岡町 2003），６・７：（八戸市 2003），８～10（岩手県 1998）
第５図　１：（八戸市 1991a），２～９（八戸市 2003），10：（八戸市 2008），11～27：（岩手県 1995）
第６図　１～10：（八戸市 1991a），11～16：（八戸市 2003），17・18：（岩手県 1998），19：（岩手県 1995）
第７図　１～９：（八戸市 2008），10～25：（岩手県 1995）
第８図～第10図：（秋田県 2011）
第11図：（青森県 1982）
第12図　１～５：（青森県 2003），６～15：（青森市 1979），16～21：（岩手県 1986b）
第13図　１～６：（階上町 2000），７～11：（青森市 1979）
第14図　１～６：（八戸市 2003），７～11：（岩手県 1983）
第15図　１～８：（秋田県 2011），９～18：（青森県 1987）
第16図　１～５：（岩手県 1986c），６～11：（秋田県 2011）

（早稲田大学會津八一記念博物館助手　〒171-0051 東京都豊島区長崎６－28－21－203）